

Title	19世紀中葉の東南アジアの人口 : Journal of the Indian Archipelago and Eastern Asia における記述をめぐって
Author(s)	坪内, 良博
Citation	東南アジア研究 (1994), 32(3): 255-305
Issue Date	1994-12
URL	http://hdl.handle.net/2433/56521
Right	
Type	Journal Article
Textversion	publisher

19世紀中葉の東南アジアの人口

— *Journal of the Indian Archipelago and Eastern Asia* における記述をめぐって — *

坪 内 良 博 **

Population of Southeast Asia in the Mid-nineteenth Century :

Population Counts Appearing in the *Journal of the Indian Archipelago and Eastern Asia* *

Yoshihiro Tsubouchi **

This paper aims to compile and evaluate the information on the population of Southeast Asia in the Mid-nineteenth century appearing in the *Journal of the Indian Archipelago and Eastern Asia*, which was published from 1847 to 1860 in Singapore. The journal contains considerable numbers of population figures for the pre-census period, reflecting the people's and the editor's interests in the general situation surrounding Singapore in this period. The information on population covers Sumatra, the Malay Peninsula, the Straits Settlements, Java, Bali, Lombok, Sulawesi, Borneo, and other parts of insular Southeast Asia.

The general tendency of the population counts of insular Southeast Asia in this period by the Europeans is toward underestimation. This is especially true for the inland areas of the larger islands, which were remote from the European sphere of influence. Populations of the small islands located on commercial routes are reported relatively accurately or even overestimated. Populations of the European settlements are sometimes overestimated and their growth rates tends to be exaggerated. Underestimation of native populations by the Europeans is to be expected, but despite this bias it is clear that the population density in insular Southeast Asia was small enough to attract planters and settlers.

I は じ め に

東南アジアは、中国・インドという巨大な人口を擁する地域に挟まれて、その相対的な人口希薄さによって特徴づけられる。島嶼部東南アジアでは、ジャワ島、バリ島、およびスマトラ島の一部を除いてこの人口希薄がとりわけ著しい。このような小人口状態はこの地域の社会編

* 本稿は文部省科学研究費補助金重点領域研究「総合的地域研究の手法確立」A02班「地域性の形成論理」の研究成果の一部である。

** 京都大学東南アジア研究センター ; The Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University

成に大きな影響を与えたが、それでは実際に、どれくらいの人口がこの地域に分布していたかを示すことは意外に難しい。土着の支配者によって住民数が公表されることは、まずなかったからである。中国系の資料による情報は重要ではあるが、現在のところ補足的に利用できるに過ぎない。ヨーロッパ人がこの地域に強い関わりを持つようになってはじめて、人口に関する情報量が飛躍的に増大した。それは19世紀のことであるが、この時点でも、情報はまだ断片的である。本稿では、19世紀中葉に出版された *Journal of the Indian Archipelago and Eastern Asia* (以下、*JIA* と略称する) を取り上げて、そこに掲載された人口に関する情報を整理することを試みる。この雑誌は1847年から1860年にかけて、英人 Logan を中心に編集発行されたいわば当時の英領植民地における情報誌で、新聞で報道される貿易・政治関係の記事に満足せず、歴史、地理、言語、文学、民族誌等に焦点をあてて編集されている。取り上げられた地域は、蒸気船によるコミュニケーションの確立を背景に、海峡植民地およびマレー半島のほかに、スマトラ、ジャワ、ボルネオ、スラウェシ、フィリピン、マルク、バリ等を含んでいる。

II St. John の東インド諸島人口推計

JIA に掲載されている最も包括的な人口推定は、東インド諸島（ただしボルネオおよびスラウェシを除く）に関して、Spenser St. John が行なっているものである。1849年時点で、18,436,622人の人口数が提示されている [St. John 1849]。*JIA* の編集者 Logan は、St. John の数値が高すぎるという感触を示しており、随所に注記を加えている。ここではまず、St. John の数値とその依拠した文献などを示しながら全体像を把握することを試みよう。彼の人口推計は、(1) マレー半島および海峡植民地、(2) スマトラおよび属島、(3) ジャワおよびその他のインドネシアの諸島に分けて示されている。

マレー半島および海峡植民地の人口に関して、St. John は、1839年に出版された Newbold の数値 [Newbold 1839: 418-419] に依拠しつつ、若干の修正を加えて、表1のような数値を示している。¹⁾ 海峡植民地のうちペナン（プロビンスウェルズレイを含む）とマラカに関しては、St. John の数値はセンサス値と増加率との組合せによる推計である。ペナンについては、1828年の60,551人と1833年の85,275人を念頭において1848年の168,596人が計算されているが、実際にはそれよりは低めの120,000人という推定値が記載されている。マラカにつ

1) St. John と Newbold の地名表記法には、表1に見られるように、かなりの違いがあり、これらはさらに現在の地名表記と異なっている場合が多い。本報告においては、他の表についても、地名に関しては、煩雑さを避けるため原則として著者の表記をそのまま採用した。ただし、本文中においては、判明するものについて、現在用いられることが多い表記あるいは他の地図帳などに見られる表記を括弧内に示すことがある。

坪内：19 世紀中葉の東南アジアの人口

表 1 St. John によるマレー半島および海峡植民地人口（付 Newbold による人口）

St. John による人口		Newbold による人口	
Kidah	50,000	Quedah and Ligore	50,000
Pera'	35,000	Perak	35,000
Salañgor	12,000	Salangore and Calang	12,000
Johore	25,000	Johore (incl. Sejamet and Muar)	25,000
Pahang	40,000	Pahang	40,000
Kemaman	1,000	Kemaman	1,000
Trañgganu	30,000	Tringanu	30,000
Kalantan	50,000	Kalantan	50,000
Patani	30,000	Patani	10,000
Suñgei Ujong	3,200	Sungie-ujong	3,600
Ranbau	9,000	Rumbowe	9,000
Johol	2,000	Johole	3,080
		Jompole	2,000
		Jellabu	2,000
		Srimenanti	8,000
Muar	2,400		
Orang Binua (Johole)	1,000		
Orang Binua of the rest of the Peninsula	25,000	Aborigines scattered over the Peninsula	9,000
Pinang and Province Wellesly	120,000	Province Wellesley	46,880 (1835)
Malacca	46,882	Malacca and Naning	37,706 (1836)
Singapore	60,000		
Total	542,482	Total	374,266

出所：St. John [1849: 380-381] および Newbold [1839: 418-419] による。

いては、1818 年に 25,000 人であったものが、Newbold の 1836 年の数値と比較すると 18 年間に 12,706 人増加したことになり、この増加率を適用して 46,882 人という数値が示されている。シンガポールの人口の出所は明らかにされておらず、概数で 60,000 人が与えられている。²⁾

- 2) Newbold の示す合計人口 374,266 人に対して、St. John のそれは 542,482 人と相当多くなっている。これは前者にはペナンおよびシンガポールの人口が含まれていないことに起因する部分が大きい。ケダー、ペラク、スランゴール、ジョホール、パハン、クママン、トレンガヌ、クランタンなどのマレー半島の諸州については、St. John は、10 年の歳月の経過にもかかわらず、Newbold の数値をそのまま踏襲している。今日タイ領に含まれるパタニについては、St. John の数値は 30,000 人で、Newbold の 10,000 人を大きく上廻っている。これは Newbold が、パタニはもともと人口 54,000 人であったが、シャムの攻撃のために 44,000 人減少したと捉えているのに対して、減少数を 24,000 人に見積り直したためである。ヌグリスンビランの人口については、St. John は、Newbold が数値を示す六つの小国のうち三つについては言及せず、スンガイウジョン、ルンバウ、ジョホル (Johol=Johole) だけをとりあげている。しかもそれぞれの人口はルンバウを除いて Newbold の示す数値よりやや少ない。このうちジョホルに関しては、ジョホルのオランビヌアという 1,000 人からなる別項が設けられており、これを考慮すると St. John の数値は Newbold のそれにほとんど等しくなる。スンガイウジョンについては、St. John の数値は Newbold の 3,600 人よりも 400 人だけ少ない。これも同様に、そこに含まれるオランビヌアを、「ジョホル以外の半島部のオランビヌア」に含めたためかも知れない。John と Newbold の間にもっとも大きな差が存在するのは、原住民に関するものであって、「ジョホル以外の半島部のオランビヌア」として St. John が 25,000 人を推定するのに対して、Newbold は「半島部に分散する原住民」として 9,000 人を数えている。Newbold が示すヌグリスンビランの他の三小国の人口の合計 12,000 人を St. John がすべて原住民のカテゴリーに入れてしまったとしても、なお 25,000 人対 21,000 人と St. John の原住民に関する見積りのほうが大きい。海峡植民地を除く、マレー半島の上述の地域に関して、St. John の合計人口は 315,600 人で、Newbold の 289,680 人を 25,920 人上廻っている。

表2 St. John によるスマトラ人口 (付 Temminck による人口)

	St. John による人口	Temminck による人口
Barus から Siack に至るアチェ人	600,000	600,000
Achin から Rauw に至るバタック人	1,200,000	1,200,000
西海岸 Barus から Indrapura, および 東海岸 Siak から Palembang に至る 内陸部および海岸部のマレー人	2,000,000	2,000,000
ルジャン人, パスマ人等	600,000	600,000
ランボン人, および南西海岸の一部	150,000	150,000
	4,550,000	4,500,000
Nias	250,000	250,000 ~ 300,000
Batoe グループ	3,270	
Poggy, Engano 等	10,000	
Linga, Bintang, Dryon, Singkip, Karimon 等	100,000	88,000
Banka	40,000	35,000
Billiton	7,000	
Anambas グループ	3,500	
Aor, Tingi 等	1,000	
	414,770	

出所: St. John [1849: 383] および Temminck [1847: 2-3, 98, 107, 117] による。

上述の推計値に対して, Logan は2つの箇所で注記を加えている。その1はジョホールに関して, 全人口25,000人が余りにも多過ぎるとみなし, 他の多くのケースについてもそうではないかと疑っている。その2はマラカに関して, 1847年センサス人口が54,985人であったことを記している。

スマトラの人口については, St. John は, Temminck [1846-49] に示された数値を踏襲し, これに属島の人口を加えている。St. John によるスマトラ人口と Temminck によるものとを並記して示すと表2のようになる。スマトラ本島に関して, Temminck は表2に記載された5つの地域の人口の合計として, 4,500,000人という概数を示しているが, St. John はそれぞれをそのまま加算した4,550,000人を採用している。また本島については Temminck の数値をそのまま採用するが, 属島については多めの推定値を採用したり, あるいは増加を考慮した修正を試みている。すなわち, ニアス島についてはラッフルズの推定値230,000人をとらず, Temminck が引用する Oppe の250,000人ないし300,000人という推定 [Temminck 1847: 98] から250,000人を採用している。リンガ・ビンタン諸島については1840年における88,000人という数値 [Temminck 1846-49: II, 107] に代えて, 海賊が活動しなくなったという理由で, 9年間で12,000人の増加を考慮して, 100,000人としている。バンカ島については, Temminck の35,000人 [*ibid.*: II, 117] に対して, 気候および労働状況を考慮しひかえめの増加を推定しつつも, 9年間で5,000人の増加を認めて, 40,000人としている。このよ

表 3 St. John によるマレー半島・スマトラ以外の東インド諸島人口

地 域 お よ び 摘 要	人 口
Java および属島	9,560,380 (1845)
3 年半における増加	500,300
Bali	900,000
Lombok	250,000
Sumbawa	200,000
Floris	278,000
Solor, Adenara, Lombatte, etc.	157,000
Sumba	425,000
Timor	639,000
計	12,909,380

出所：St. John [1849: 384] による。数値は原文のまま。

うな手続きを経て、St. John はスマトラの人口を、属島を含んで、4,964,770 人と推定している。³⁾

マレー半島およびスマトラ以外の東インド諸島の人口については、表 3 のような数値が示されている。この地域の人口の主要部分を占めるジャワ島に関しては、1845 年センサス人口 9,560,380 人に、3 カ年半の増加推定値 500,300 人を加えた数値が採用されている。⁴⁾ 第 2 の大きさの人口を有するバリ島については、Temminck [1846-49: I, 340] の 800,000 人と、Van Den Broek (出所不明) の 1818 年の推計 987,500 人の中間値、900,000 人が採られている。

St. John による東インド諸島の人口推定の特徴としては、以下のことが挙げられよう。

- (1) 第 1 群から第 3 群にかけて単位地域の大きさが変化し、第 1 群においてもっとも細かく、第 3 群が最も粗い。
- (2) 総人口のみが示されている。
- (3) 植民地については人口増加が勘案されるが、土着部分においては増加を計上しない場合が多い。
- (4) 比較的小さい島に相対的に大きな人口の居住を認めているように見える。島の人口の相対的評価が大きい。

3) St. John のスマトラに関する人口は、Temminck [1846-49] による部分が多いが、Temminck の数値は、Francis [1839] の引用ではないかと思われるところがあり、Logan もこの点を注記している。ちなみに Francis によると、アチェ人 600,000、バタック人 1,200,000、マレー人 2,000,000、ルジャン人およびパスマ人 600,000、ランポン人 150,000、計 4,550,000 となっている [ibid.: 31]。

4) Bleeker [1863 b] によると、1845 年のジャワ人口は、9,551,385、1848 年には 9,660,582、1849 年 9,584,130 となっている。Money [1861] の付表によると、1845 年人口は 9,530,780、1848 年には 9,570,000、1849 年は 9,584,130 である。

III Logan のスマトラ人口推計

St. John の推計に先行して、JIA の同じ巻で Logan 自身もスマトラの人口に関する推計を報告している。Logan の推計方法の特徴は、第1に民族ないし種族別に推計を行なっていること、第2に地域別統計が入手できる場合にはそれを利用すること、第3に地域別統計不在の場合には、面積×推定人口密度から人口量を求めていること、である。表4は Logan の総括

表4 Logan によるスマトラ人口

民 族 ・ 地 域	人 口
未開諸族 (Wild Tribes)	6,000
Orang Malayu	
山地部	
Menangkabau	385,000
同・海岸部居住者	64,350
Sapulo Bua Bandar	40,000
同・海岸部居住者	31,200
Korinchi	75,000
Rawa	25,000
北部海岸	
東海岸	60,000
西海岸	24,100
東部低地および丘陵地	184,000
他の地域のマレー人	10,000
小 計	898,650
Orang Palembang	201,000
Orang Rejang	72,000
Orang Serawi	160,000
Orang Lampong	92,900
Orang Batta	
西海岸	4,300
東部低地および丘陵地	63,280
山岳地帯	
北 部	36,000
中 部	125,280
南 部	83,000
小 計	311,860
Orang Ache	450,000
合 計	2,186,410
西部の諸島	
Orang Engano	900
Orang Mantawei	5,000
Orang Niha	286,000
Orang Maruwi	3,000
小 計	294,900

出所：Logan [1849: 361]。

表である。以下、彼の推定方法を紹介しつつ、必要に応じて St. John の数値との比較を行なうことにする。

(1) 未開諸族 (wild tribes) スマトラ各地の未開諸族の人口を暫定的に 6,000 人と推定する。このうち南部のアブンおよびクブは 2,000 人を占める。

(2) マレー人

i) 山地のマレー人

a. ミナンカバウ人

Francis [1839: 94] の数値から、ミナンカバウに属する 10 地域の人口を加算し、総人口 385,000 人を得ている。

b. Sapulo Bua Bandar などのマレー人

ヨーロッパ人による調査が行なわれておらず、人口密度は低い。1 平方地理マイル⁵⁾あたり 15 人 (1 km²あたり 4.4 人) と仮定、3,250 平方地理マイルに対して 40,000 人とする。(この計算では 48,750 人になるが、8,750 人を切捨てている)。

c. Korinchi 人

居住地域を 100 地理マイル×50 地理マイル=5,000 平方地理マイルと推定。1 平方地理マイルあたり 15 人として、75,000 人。

d. Rawa 人

居住地域を 40 地理マイル平方=1,600 平方地理マイルと推定。1 平方地理マイルあたり 16 人程度にあたる 25,000 人が Francis から引用されている。

ii) 山地マレー人の西方の丘陵地のマレー人

a. 沿岸部のミナンカバウ人

Francis の数値に従って 22 地域の人口の合計値として 64,350 人。

b. Sapulo Bua Bandar の沿岸部

Francis の数値に従って 16 地域の人口の合計値として 31,200 人。

iii) 低地 (すなわち東部) のマレー人

シアク、インドラギリ、カンパル、ジャンビ、パレンバン (一部) などを含む 36,800 平方地理マイルで、1 平方地理マイルあたり 5 人 (1 km²あたり 1.5 人程度) として、184,000 人。

iv) 北部東海岸のマレー人

5) 1 英地理マイル (Geographical Mile) は 1 海里に相当する。JIA ではこの外に、1 蘭地理マイル = 4 海里 = 7.407407 km が用いられたり、1 蘭マイル = 5.5556 km が使われたりするので、面積の扱いには注意が必要である。

Anderson [1826] に依拠して 600 平方地理マイルに散在する 45 の地域について、小は 20 人、大は 10,000 人に至るそれぞれの人口を集計して得られた 56,510 人をもとにして、Anderson に見落された部分を斟酌して、60,000 人の概数を示している。

v) 北部西海岸のマレー人

Francis に依拠して、小は 200 人、大は 3,000 人に至る 15 地域の人口を集計し、24,100 人を得ている。(集計値は 24,300 人であって、ミスプリントないし計算間違いが含まれている)。

vi) その他のマレー人

スマトラの他の地域のマレー人の総計を 10,000 人と推計している。ニアス島だけでも 3,000 人、アチェの領域およびパレンバンに相当数のマレー人がいるものと考えている。

(3) パレンバン人

13,400 平方地理マイルに、1 平方地理マイルあたり 15 人 (1 km²あたり 4.4 人) として、201,000 人。

(4) ルジャン人

Francis に従って Rejang (10,000 人) および Ampat Lawang (14,016 人) の人口が、1,500 平方地理マイル内に居住し、1 平方地理マイルあたり 16 人 (1 km²あたり 4.7 人) であることを利用して、同じ密度を残りの 60 地理マイル×50 地理マイル=3,000 平方地理マイルに適用して、合計人口 72,000 人を得る。

(5) スラウィ人

65 地理マイル×25 地理マイル=1,625 平方地理マイルからなる西方沿岸に、Francis によると 26,530 人が居住するが、これと同じ密度 (すなわち 1 平方地理マイルあたり 16 人、1 km²あたり 4.7 人) で残りの 65 地理マイル×25 地理マイル=1,625 平方地理マイルの内陸部が居住されているとみなす。さらにパレンバン在住の 1,000 人を加えて、159,260 人を得るが、これを 160,000 人の概数にまとめている。

(6) ランボン人

Zollinger の示すランボン地域の人口 82,900 人に、Francis の Kroe 居住人口 10,000 人を加えて 92,900 人を得る。人口密度は 1 平方地理マイルあたり 11 人 (1 km²あたり 3.2 人) 程度になる。

(7) バタック人

i) 西海岸のバタック人

5 つの地域について、200 人ないし 2,000 人の人口を合計して、4,300 人を得てい

る。

ii) 山脈東側の低地および高地のバタック人

Anderson の報告に従って算出された 8 地域の合計人口 126,560 人から、2 分の 1 を差し引き、63,280 人を得る。マレー人首長達が支配下のバタック人の数を誇張して報告しているというのがこの控えめな評価の理由である。人口密度は 1 平方地理マイルあたり約 20 人（1 km²あたり 5.8 人）となっている。

iii) 山地部のバタック人

a. 北 部

60 地理マイル × 30 地理マイル = 1,800 平方地理マイルに 1 平方地理マイルあたり 20 人（1 km²あたり 5.8 人）として 36,000 人。

b. 中 央 部

4,176 平方地理マイルに、1 平方地理マイルあたり 30 人（1 km²あたり 8.7 人）として、125,280 人。

c. 南 部

Pertibi 28,000 人と、Mandheling 55,000 人を加えて 83,000 人。これらの数値の出所は明らかではなく、たとえば Francis は、Mandheling の人口を 76,000 人とみなしていることが注記されている。南部地域の人口密度は 1 平方地理マイルあたり約 12 人（1 km²あたり 3.5 人）となる。

(8) アチェ人

22,600 平方地理マイルに 1 平方地理マイルあたり 20 人（1 km²あたり 5.8 人）として 450,000 人と推定されている。

(9) エンガノ島人

次に述べられるムンタワイ島と同じ人口密度（1 平方地理マイルあたり 2.2 人強、1 km²あたり 0.65 人）を 400 平方地理マイルに適用して 900 人。

(10) ムンタワイ島人

2,240 平方地理マイルに 5,000 人。

(11) ニアス島人

Francis に従って、ニアス島およびバトゥ諸島を合わせた 1,800 平方地理マイルに 286,000 人。ニアス島のみで 1,200 平方地理マイルに 256,000 人。Donlebin による 1846 年時点で 169,500 人という情報（*Tijdschrift voor Neerland's Indië* 1848: 174）を見逃したと注記されている。

(12) マルイ人

バニャ島などを含む 600 平方地理マイルに、1 平方地理マイルあたり 5 人（1 km²あた

り 1.5 人) として 3,000 人。

以上の情報を提示しつつ Logan は、スマトラ本島の人口 2,186,410 人、西側の諸島の人口 294,900 人を推計している。ちなみにスマトラ本島の人口密度は一平方地理マイルあたり 17 人 (1 km²あたり 5 人) である。前述の St. John によるスマトラ本島 4,550,000 人に比較すると、2 分の 1 以下であり、これだけ大きな相違が現われることはきわめて興味深い。なお、Logan がしばしば引用する Francis は、すでに示したようにスマトラの総人口を 4,500,000 人と推定している。Logan によれば Francis の推計における誤りは、彼がデータの無い地域の人口を過大評価したためであるという [Logan 1849: 360]。しかし既に示したように、Logan はアチェ人口や Mandheling の人口の推定の場合のように、既存の人口が示されていても、なお、Francis を下廻る推定値を提示していることに注意する必要がある。アチェの場合、Francis の示す 600,000 人を削って 450,000 人としており、Francis の数値はマレー人を含むと注記しているが [ibid.: 359]、この差 150,000 人をマレー人人口として別に数えた形跡はない。Logan においては、過大評価を避けようとしてむしろ過小評価となった可能性も考えられる。

Logan の示すスマトラ本島の人口密度 1 平方地理マイルあたり 17 人は、1 km²あたり 5 人に相当し、東部低地および高地のマレー人の人口密度 1 平方地理マイルあたり 5 人は、1 km²あたり 1.5 人に相当する。これらの低い人口密度は、仮に 2 倍に増加したとしても本質的な低密度には変りがなく、このことは人口密度というものが人口推定の手がかりとして用いるためにはきわめて不完全なものであることをも示唆している。

IV マレー半島および海峡植民地

マレー半島および海峡植民地に関しては、JIA には、断片的ではあるが、人口情報が比較的多く記載されている。とくに海峡植民地に関しては情報量が多い。以下これらの断片を地域毎に紹介していくことにしよう。

ペナンの人口については、Low [1849-50] をはじめ、いくつかの記事のなかに断片的な記述が見出され、設立期のペナンおよびプロビンスウェルズレイの人口の動きをある程度知ることができる。人口数に関する記述を年次を追って簡約すると以下の如くとなる。

- (1) 1804 年の Farquhar の報告書によると、ケダーからの譲渡時点におけるペナン島居住者は、4 家族 23 人であった [Low 1851: 409]。
- (2) 1792 年のペナン島住民数は 7,000 人で、東インド会社職員および使用人数は 1,000 人で

あった [Low 1849-50: 654]。

- (3) 1794 年の Francis Light の報告によると、ペナンの華人人口は 3,000 人であった [Anonymous 1850-52: 1851, 9]。
- (4) 1802 年から 1806 年の間に書かれたとみられる報告書によると、この時点から数年前のペナン島の華人人口は 5,000 人であった [ibid.: 1852, 150]。
- (5) 1800 年時点でのプロビンスウェルズレイの人口は、2,000 ～ 3,000 人であって、1,500 平方マイルの地域に散在していた [Low 1849-50: 1850, 12]。
- (6) 1810 年時点における土着人口（ペナン島）は、24,424 人であった [ibid.: 1850, 16]。
- (7) 1816 年のセンサスによると、ペナン島の人口は 37,445 人で前年に比して 2,450 人増えた。プロビンスウェルズレイの人口は約 4,000 人であった [ibid.: 1850, 20]。
- (8) 1820 年時点におけるプロビンスウェルズレイの人口は 5,457 人であった [ibid.: 1850, 25]。
- (9) 1822 年に、プロビンスウェルズレイの人口は、ケダーからの移住により著しく増加した [ibid.: 1850, 109]。
- (10) 1824 年 12 月 31 日におけるペナン島の人口は 37,943 人、プロビンスウェルズレイは 16,479 人、計 54,422 人であった [ibid.: 1850, 113]。
- (11) 1827 年のペナン島人口は 30,655 人であった [ibid.: 1850, 117]。
- (12) 1831 年、プロビンスウェルズレイの人口は 26,000 人 [ibid.: 1850, 363]。
- (13) 1831 年、シャム軍がケダーに進攻したので、16,000 人がケダーを去ってプロビンスウェルズレイに移動した。ケダーには 20,000 人足らずが残留した [ibid.: 1850, 366]。
- (14) 1832 年、プロビンスウェルズレイの人口は 50,000 人に増加した [ibid.: 1850, 369]。
- (15) 1854 年の記述によるとペナンに到着する華人移民は毎年 2,000 ～ 3,000 人で、ペナンからプロビンスウェルズレイ、シャム、マレー領に移住していった [Anonymous 1854 a: 3]。
- (16) 1859 年時点において、年間移民数は華人 4,000 ～ 5,000 人、インド人 (kling) 3,000 ～ 4,000 人、ジャワ人 1,500 ～ 2,000 人であった。ただし華人はマレー領あるいはシャム領に移住し、インド人は 3, 4 年で帰国、ジャワ人は契約終了後直ちに帰国するので、たえず新規労働者の需要がある [Anonymous 1859: 52]。

上述の数値は海峡植民地の一つペナンおよびその近辺の人口がもともときわめて少なかったこと、移民の通過地としての機能を果たしつつもペナン自体が急激な人口増加を遂げてきたこと、ケダーにおける戦争がとくにペナン島の対岸プロビンスウェルズレイの人口を急激に増加させたことなどを示している。前述の St. John による 1849 年時点におけるペナンおよびプロ

ビンスウェルズレイの人口は120,000人であって、この数値の算出は激しい人口増加を考慮しつつも増加率の鈍化を見込んでいる。⁶⁾

ケダーの人口は、シャムとの戦争によって著しい変動を経験したが、*JIA* に散見される記述は以下の如くである。

- (1) 1786年、Light がペナンを譲渡されたときのケダー人口は40,000人あるいは80,000人であった。マレーの首長は男子とくに健康な身体の子の人口のセンサスを行なったので、人口は40,000人の倍であったであろうと注記されている [Low 1849-50: 1849, 603]。
- (2) 多数のパタニ住民がケダーのクアラムダに移住したが、その数は15,000人に達する [Topping 1850: 44]。
- (3) 1786年のLight のインド総督への手紙によると、ケダーは長さ150マイル、幅30~35マイルの小国であって、約100,000人の住民をもつことが記されている [Anonymous 1858: 186]。
- (4) 1831年、シャム軍がケダーに進攻したので、16,000人がケダーを去ってプロビンスウェルズレイに移動した。ケダーには20,000人足らずが残留した [Low 1849-50: 1850, 361 再掲]。
- (5) 1849年の時点でシャム属領として数えられているケダー人口は25,000人である [*ibid.*: 1849, 607]。
- (6) 1850年において、Logan は遠くない過去にケダーは100,000人の住民を数えたと記している。1850年現在、Tuanku Dai 等によるケダー平野の人口は下記の如くである [Logan 1851: 58]。

ケダー平野	
Tuanku Dai の支配地	4,500
Tuanku Anum の支配地	2,000
ムダ (Muda)	1,300
プルリス (Purlis=Perlis)	2,500
サトゥン (Stul)	1,000
計	11,300

6) Braddell [1861] の示す1851年のペナン人口は43,143、プロビンスウェルズレイ人口は64,908、計108,051であって、この推定をやや下廻っている。

ケダーに関連してパタニの人口の記述を拾いだすと、以下のようになる。

- (1) 1786 年 7 月にシャム軍はパタニに進攻したが、この頃のパタニの人口は約 115,000 人であった [Low 1849-50: 1849, 608-609]。
- (2) かつてパタニは 16 歳から 60 歳の男子 150,000 人の人口をもっていたと言われる [Low 1849: 180]。
- (3) 1849 年の時点でシャム属領として数えられているパタニ人口は 50,000 人である [Low 1849-50: 1849, 607]。

パタニもシャムとの戦争を契機に大幅な人口減少を経験している。パタニの人口の一部がケダーへ移動し、さらにケダーの人口の一部がプロビンスウェルズレイへ移動していることが分かり、当時のマレー半島の人口が戦争のためにきわめて変動的であったことを示している。

次いで、マラカを中心とする人口記述を検討してみよう。

- (1) マレー年代記の記載によると、マラカの町は、周辺人口を除いて 190,000 人 (nineteen laxas) の住民を含んでいた [Anderson 1854: 148]。
- (2) 1509 年、リゴール王がシャム王からパハン攻略の命を受けたとき、マラカのスルタンはパハンに援軍を送ろうとしたが、このときマラカ市の住民は、海岸部および内陸部を除いて 90,000 人 (9 laxas) であった [Braddell 1852: 40; Anderson 1854: 148, ただし Anderson では ninety Lac となっている。]。
- (3) 1505 年にマラカを訪れたと思われる John Francis Gomelli Careri は、マラカは 5,000 人を有し、大部分はポルトガル人のカトリックであると述べている [Blundell 1848: 72]。
- (4) 1818 年のマラカ人口は 25,000 人、1836 年はナニンを含んで 37,705 人、1849 年の推定値は 46,882 人である [St. John 1849: 381]。
- (5) 1826 年のマラカ人口は 49,086 人で、その内訳はキリスト教徒 26,000 人、マレー人 16,000 人、中国人 4,478 人、キリン人 1,622 人、ヒンズー教徒 986 人である [Low 1849-50: 1850, 114]。
- (6) 1847 年 4 月現在のマラカ人口は表 5 の通りである。1846 年人口が付記されている。総人口は、1846 年 52,713 人、1847 年 54,995 人である [Westerhout 1848: 173]。
- (7) 最近のセンサスによると人口は 60,000 人を越えている [Blundell 1848: 743]。
- (8) 昔は城塞の中に 11,000 人ないし 12,000 人がいたが、現在は 200 人ないし 300 人を越えない [Valentyn 1850: 67]。
- (9) 1850 年頃華人移民は年間 2,500 人ないし 3,000 人で、ジャンクでマラカに到着した [Croockewit 1854: 123]。

表5 マラカ人口

民 族 等	1846 年	1847 年
キリスト教徒	2,700	2,784
マレー人	33,161	33,473
華人	9,414	10,589
アラブ人	177	195
バタック人	329	387
ヒンズー教徒	1,082	1,023
チュリア人 (マラバル商人)	5,048	5,454
シャム人	31	35
ベンガル人	179	199
ジャワ人	173	313
ブギス人	178	248
バリ人	11	46
非イスラム原住民	45	50
有罪人	185	199
計	52,713	54,995

出所：Westerhout [1848:173] による。

長い歴史を有するマラカにおいては、最盛期と衰退期の差が大きい。1826年のLowの数値は、1846年および1847年に比してキリスト教徒が著しく多く、一桁間違っている可能性さえある。この場合には合計人口も訂正されねばならない。⁷⁾このような数値をそのまま記録するだけ当時の英人にヨーロッパ勢力への過大評価が内在していたと考えることができるかも知れない。

マラカ近辺のマレー人支配下の国々の人口については、頻度は相対的に少ないが、若干の記述を見出すことができる。

- (1) 1824年頃のペラクの人口は約30,000人である。スランゴールの人口は1,000人ないし1,500人を越えない [Anderson 1854: 273]。
- (2) Lowの記述によるとスランゴールはペナンの南に位置し、南方でペラクに境界を有する小国であって、現在(1849年頃)せいぜい2,000人あるいは3,000人の人口を有している [Low 1849-50: 1849, 609]。
- (3) 1839年の時点でNewboldはパハンの人口を40,000人と推定しているが、Thomsonが土地の居住者から得た数値は、華人および奥地在住の原住民を除いた、マレー人およびアラブ人の合計14,110人であった。地域別内訳は表6の通りである [Thomson 1851: 136]。
- (4) 1850年頃のペラクのマレー人人口は最大20,000人を越える。15,000人と評価したいと

7) Braddell [1861] によると、1827年のマラカにおけるヨーロッパ人人口は、2,522、全人口は33,162である。

表 6 パハン人口 (1851 年頃)

地 域	人 口
パハン川およびその支流	10,000
Indau	2,000
Pontean	100
Rumpin	50
Bubar	40
Merchong	20
Tioman 島	200
Tingi, Sibul および属島	300
Aur	1,400
計	14,110

出所：Thomson [1851: 136] による。

ころである [Low 1850: 498]。

- (5) ジョホル (Johore) 王国の全人口は約 3,000 人であるといわれる [Favre 1849: 154]。
- (6) ルンバウ (Rumbau) 王国の全人口は約 9,000 人である [ibid.: 158]。
- (7) ジェルブ (Jellabu=Jelebu) の人口は 3,000 人に過ぎない [ibid.: 159-160]。
- (8) Low は英直轄領を除くマレー半島人口の最大値を下記のように見積っている [Low 1849-50: 1849, 606-607]。

独 立 国	
ジョホールおよび属領、ならびにパハン	40,000
トレンガヌ	30,000
クランタン	40,000
ペラク	25,000
スランゴール	3,000
シャムの属領	
パタニ	50,000
ケダー	25,000
計	213,000

Low がここにまとめているマレー半島の各国の人口は、例えばペラクについては、彼自身が別の箇所で示した最大推定値 20,000 人を上廻り、またスランゴールについては大きい方の推定値を採用している。この意味で彼にとっては上述の推定値は過大評価とさえ言い得るものであった [ibid.: 1849, 605]。Low が示すマレー各国の人口を、既に紹介した Newbold の数値 (表 1 参照) と比較すると、ジョホールおよびパハン、クランタン、ペラク、スランゴール、ケダーに関しては、Newbold の人口の方がはるかに大きい。トレンガヌに関しては両者の推計は一致し、パタニに関してのみ Low の推定値の方が大きい。Low の示すスランゴール人口 (最大値として 3,000 人) が、Newbold のスランゴール (クランを含む) 人口 12,000 人

表7 シンガポール人口 (1845)

民 族 等	男	女	計
ヨーロッパ人 (Europeans)	204	132	336
インド系英国人 (Indo Britains)	158	122	280
アルメニア人 (Armenians)	38	27	65
マレー人 (Malays)	6,217	2,818	10,035
華人 (Chinese)	28,765	3,367	32,132
ベンガル人 (Bengalese)	350	200	550
クリン人 (Klings)	3,948	700	4,648
ジャワ人 (Javanese)	210	50	260
ブギス人 (Bugis)	1,340	631	1,971
ポルトガル人 (Portuguese)	214	168	382
アラブ人 (Arabs)	210	50	260
非イスラム原住民 (Caffres)	26	33	59
パルシー人 (Parsees)	14	0	14
ボヤン人 (Boyanese)	223	9	232
小 計			52,347
罪 人 (Convicts)			1,500
兵 士 (Military)			487
病 人 (Patients)			70
ヨーロッパ人病人 (Hospital European)			17
船上生活者 (Floating Population)			3,000
合 計			57,421

出所：Little [1848: 472] による。数値は原文のまま。

を著しく下廻ることは、Newbold の過大評価というよりは Low の情報不足とも言えそうである。同様に、ヌグリスンビランの諸国が Low の取り扱いにおいて不明であることも情報不足を物語るかも知れない。ここでは、Newbold の示す人口さえも過大評価と判断するようなほぼ同時代の推計値が存在することに注意しておきたい。

最後にシンガポールに関する記載を点検してみよう。1819年にこの島が英国の植民地になったとき、そこには200人ないし300人のマレー人がいた。この人口数から、主に移民によって、1845年には57,421人にまで増加している [Little 1848: 472]。民族および性別にみた同年の人口は表7に示す通りである。この表の数値は一見精緻に見えるが、民族別人口の合計に疑問があり、また、末尾に付された船乗り等を含むと思われる水上人口 (floating population) は概数で示されている。罪人、兵士、病人、水上人口等を含む正規人口以外の存在は、後に整備された統計表として年次比較に供されるシンガポール人口の性格を理解するために有用である。Little はこの表の1845年時点の人口は、彼の執筆時点 (1848年) で既に不正確になっており、おそらく70,000人と推定されると述べている [ibid.: 472]。

1849年のシンガポール人口がJIA第4巻付表として示されている。人口は、町、田舎、島、川に分けて民族別に示されているが、ここではシンガポール人口の民族別構成を表8に示す。

表 8 シンガポール人口 (1849)

民 族 等	男	女	計
ヨーロッパ人 (Europeans)	243	117	360
ユーラシアン (Eurasians)	472	450	922
アルメニア人 (Armenians)	35	15	50
アラブ人 (Arabs)	121	73	194
バリ人 (Balinese)	78	71	149
ボヤン人 (Boyanese)	720	43	763
ブギス人 (Bugis)	1,452	811	2,263
非イスラム原住民 (Caffries)	1	2	3
華人 (Chinese)	25,749	2,239	27,988
コーチシナ人 (Cochin-Chinese)	11	16	27
ジャワ人 (Javanese)	1,139	510	1,649
ユダヤ人 (Jews)	18	4	22
マレー人 (Malays)	6,612	5,594	12,206
インド人 (Natives of India)	5,423	838	6,261
パルシー人 (Parsees)	23	0	23
シャム人 (Siamese)	4	1	5
計			52,891
兵 士			609
罪 人			1,548
船上生活者			2,995
居住地不明			1,000
合 計			59,043

出所：Jackson [1850: 付表] による。数値は原文のまま。

総人口 59,043 人は、上述の Little の推定値 70,000 人に達せず、彼の推定が増加への希望的観測に支えられていたことを示唆している。1845 年と 1849 年の統計においては、民族分類が若干変更されている。前者におけるインド系英国人 (Indo Britains) は、おそらく後者のユーラシアン (Eurasians) に該当し、この数は 280 人から 922 人へと増加している。他に著しい増加を示すのはジャワ人で、260 人から 1,649 人になった。1849 年において、新たに出現しているのは、バリ人、コーチシナ人、ユダヤ人、およびシャム人である。他方、アルメニア人、非イスラム原住民については減少が生じている。華人の減少は 4,144 人に及んでおり、この減少が実際におこったとすれば、Little の推定は、これまでの趨勢を基礎にしているということになる。

華人移民の職業構成については、Siah U Chin による一覧表が 1848 年に掲載され [Siah U Chin 1848: 290]、次いで 1850 年に上掲のセンサス人口表の裏面に民族別・職業別人口が報告されている。さらに、これらの表は 1855 年に「海峡華人に関するノート」という記事の中に整理されて再掲されている。ここで、Siah U Chin の表については整理されたものを、センサス人口表については抜粋を示すと表 9 および表 10 のようになる。Siah U Chin による華人

表9 シンガポール華人職業別人口 (1846)

職 業	出 身 地					
	福 建	潮 州	マラカ	マカオ	客 家	海 南
商店主・貿易商	3,100	4,700	900	350	600	100
ガンビール・胡椒栽培		10,000		400		
一般農業	2,000	2,000	100			600
サゴ製造	500					
船頭・水夫	930	660				
仲仕	800					
漁師	200	600				
石灰製造	100			250		
木炭製造		140				
煉瓦製造				500		
煉瓦職	100					
同上手伝い	700	100		500		
石工		150				
建築大工				300	1,000	
家具職				1,000	300	
材木製造				1,000	800	
船大冶				400		
鍛金細工					500	
パシ					100	
理髪師		50		200		
仕立屋・靴屋				200	100	
家事使用人				400	400	
水運び人				500		
徴税手伝い・酒、阿片調達	250					
その他	70					
失業者		600			200	
合 計	9,000	19,000	1,000	6,000	4,000	700

出所：Anonymous [1855: 116] による。

職業従事者総数が 39,400 人であるのに対して、1849 年 12 月のセンサスによる華人人口は、職業従事者 24,790 人（これは成人男子人口に一致する）、総数 27,988 人である。前者の推計が多過ぎるという指摘がなされている⁸⁾ [Anonymous 1855: 115]。

シンガポールに関しては、JIA には人口数とは別に華人移民数に関する記述が見出される。1847 年 12 月 27 日から 1848 年 4 月末に至る 4 カ月間に、マカオ（17 隻）、広東（10 隻）、アモイ（7 隻）等を含む 55 隻のジャンクによって 8,709 人、海南からの 23 隻によって 320 人、安南からの 30 隻によって 116 人、11 隻の四角帆の船によって 1,330 人、合計 10,475 人がシンガポー

8) 実際、前者は多くのカテゴリーについて、100 人あるいは 1,000 人単位の概数で示されており、中でも潮州人ガンビア栽培者および胡椒栽培者については 10,000 人という数値が与えられている。センサス人口においては、華人農業従事者は 8,426 人であり、Siah U Chin の数値においては、ガンビア栽培者および胡椒栽培者にその他の農業従事者を加えた数は 15,100 人である。Siah U Chin の数値が高過ぎるという可能性と同時に、植民地における職業移動の激しさ、および他方では政府統計の人口把握の不完全性などを考慮する必要がある。

坪内：19世紀中葉の東南アジアの人口

表 10 シンガポール職業別人口 (1849)

民 族	商 人・ 書 記	職 人	農 業 従事者	労 働 者	家 事 使用人	そ の 他	計
ヨーロッパ人	40	14	10		3	131	198
ユーラシアン	52	12	14		102	124	304
アルメニア人	3	3				24	30
アラブ人	9				13	60	82
バリ人		3	45	2	3	1	54
ボヤン人			310	303	21	69	703
ブギス人		89	242	308	8	469	1,116
非イスラム原住民						1	1
華人	98	2,322	8,426	8,303	335	5,306	24,790
コーチシナ人				6			6
ジャワ人		136	336	356	37	116	981
ユダヤ人	5				5	6	16
マレー人	3	236	450	2,757	361	733	4,540
インド人	17	181	255	1,956	415	2,113	4,937
パルシー人	7				11	5	23
シャム人						4	4
計	234	2,996	10,088	13,991	1,310	9,156	37,785

出所：Jackson [1850: 付表] による。数値は原文のまま。

ルに到着したと述べられている。この数値は、上述の Siah U Chin の記述に対する、シンガポールフリープレスの編集者からの情報に基づいた Logan の注記 [Siah U Chin 1848: 286] によるもので、12 月ないし 1 月にはじまる季節風を利用する移民船に季節性があることを考慮すると、Siha U Chin が「ジャンクで到着する人数は年間約 10,000 に達する」[*ibid.*: 286] と述べていることと一致し、彼の情報のある程度の信頼性を示唆している。「海峡華人に関するノート」の中では、1840/41年から1852/53年にいたる 13 年間（うち 1 年は欠如）の到着者

表 11 シンガポール華人到着人数

年 次	人 数
1840 / 41	5,063
1841 / 42	6,154
1842 / 43	6,391
1843 / 44	—
1844 / 45	10,680
1845 / 46	8,646
1846 / 47	9,569
1847 / 48	9,948
1848 / 49	9,817
1849 / 50	10,928
1850 / 51	8,205
1851 / 52	9,685
1852 / 53	11,484

出所：Anonymous [1855: 113] による。

数が示されている（表 11 参照）。この公的な統計は近年における増加を示しているが、これが実際の増加によるものか、あるいは数え方の改良によるものかは判断しにくい。ジャンクの船主達は統計を理解せず、旅客数あるいは貨物の梱包を数えようとする試みを課税への兆しと見做し、可能な限りの最低数で済ませようとするという [Anonymous 1855: 113]。

V ジャワ島、バリ島、ロンボック島

蘭領東インドの人口については、その出所の間接的性格が強くなるが、かなり多量の情報が収集されている。以下、その概要と性格について述べる。

ジャワ島に関しては、Temminck の書物 [Temminck 1846-49] の紹介とともに、そこに記載された総人口の引用がなされている。すなわち、1824 年 6,368,090 人、1832 年 7,323,982 人、1834 年 7,511,106 人、1837 年 7,981,284 人、1838 年 8,103,080 人である。1832 年に関しては、バタビアの町の人口 118,000 人とその内訳、ヨーロッパ人 2,800 人、華人 25,000 人、土着人 80,000 人、ムーア人およびアラブ人 1,000 人、奴隷 9,500 人が記されている。⁹⁾

ジャワ島の人口については、次に、主として 1845 年に関する Bleeker の記述の翻訳が掲載されている [Bleeker 1847 a]。人口は、理事州 (Residency あるいは Ass. Residency) 別に、ヨーロッパ人、華人、土着人、アラブ人、ブギス人等、および奴隷に分けて示され、これに加えて 1846 年の兵士の数が総数で示されている（表 12 参照）。いずれの地域においても多過ぎる数値はなく、多くの場合過少であるという評価が Bleeker 自身によって加えられており、ジャワ島総人口 9,542,045 人が示されると同時に、この報告が執筆された時点でジャワ島人口が 10,000,000 人を越えているという推定がなされている。

スラカルタおよびジョクジャカルタの人口に関しては、1828 年時点におけるこの地域への旅行記の中に断片的な記述がある。すなわち、1812 年の領土割譲後のスラカルタ領は約 100 万人、もう一人の君主の領土（ジョクジャカルタ）は、ほぼ 70 万人の人口を有し、彼らの領土は全島の約 4 分の 1 に相当する 11,000 ないし 12,000 平方マイルであるという内容を含むものである¹⁰⁾ [Anonymous 1853a: 149]。ジョクジャカルタの人口は、3 年前の戦争のために現

9) 総人口に関する記載は、Bleeker [1863] に一致している。Temminck および Bleeker の 1824 年人口は、*TNI* に記載された理事州 (Residency) 別人口 [Anonymous 1839] の合計を求めることによって得られた Widjojo [1970] の 1826 年人口 4,301,552 人をはるかに上廻っている。Peper [1970] の 1826 年人口 5,302,000 人は Widjojo の合計値の概数を丁度 1,000,000 人上廻っているが、これもまた出所は Widjojo と同じで、資料集成過程において、ジャワ土侯領の推定人口 1,000,000 人を加算したものである。Temminck の数値がこれらの数値を上廻ることは、上述の比較的新しい時代における研究者達によるジャワ人口に関する見解の再検討の可能性を示唆している。

10) Bleeker [1847] によれば、これらの 2 人の君主の領土はそれぞれ 1,803 平方マイル、926 平方マイルであって、全島面積の 7.0% を占めるに過ぎない。これらの地域の人口は、504,167 人、および 347,525 人、計 851,692 人で、全島人口の 8.9% となっている。この間の領土の変動と人口の再分布の過程は検討に値する。

表 12 ジャワ島地域別人口

理 事 州 等	ヨーロッパ人	華 人	土 着 民	アラブ人・ フギス人等	軍 隊	奴 隸
Bantam	360	813	392,887	430		29
Batavia	3,478	31,764	242,927	598		2,376
Buitenzorg	662	7,462	252,015	0		172
Krawang	100	1,843	123,705	74		30
Preang. Regentschapp	168	202	727,154	305		20
Cheribon	624	8,814	606,209	817		59
Tagal	274	788	292,934	2,820		58
Banjoemaas	150	1,640	403,852	0		12
Pekalongan	312	2,353	232,226	564		84
Bagelen	217	1,417	612,027	89		14
Samarang	2,883	9,657	739,098	2,277		582
Kadoe	174	2,484	354,377	73		3
Djocjokarta	664	1,063	345,696	55		47
Soerakarta	900	2,000	500,000	1,200		67
Japara	396	6,606	413,540	742		130
Madioen	113	1,059	312,975	102		18
Patjitan	30	100	89,077	0		9
Rembang	459	9,002	467,766	1,461		148
Kedirie	94	1,661	232,467	0		5
Soerabaija	2,736	5,111	923,687	4,427		} 907
Eiland Madara	368	6,544	280,314	8,522		
Possoerocan	578	2,229	331,981	1,163		288
Bezoekie	530	1,373	497,106	3,678		53
計	16,270	105,983	9,373,989	29,397	11,295	5,111
合 計			9,542,045			

出所：Bleeker [1847 a] による。理事州等の綴りおよび数値は原文のまま。

在ではその一部が残っているに過ぎないが、かつては 100,000 人と推定されていた [ibid.: 365]。

ジョクジャカルタの人口については、1814 年時点における比較的詳しいセンサス結果が当時の英人植民地官吏クロウファードによって示されている。それによると、結婚している男性 10,188 人、結婚している女性 10,355 人、寡夫 1,479 人、寡婦 1,919 人、未婚の若者 2,972 人、未婚の少女 2,313 人、割礼前の少年 3,956 人、研齒前の少女 3,274 人、授乳中の男児 1,721 人、授乳中の女児 1,447 人、計 39,624 人で [Crawfurd 1849: 43]、この時点におけるこの都市の人口がかつての 10 万人に到底及ばぬ状況にあったことを示している。¹¹⁾

11) Raffles [1817: II, 290] には 1815 年のスルタン領人口が、その年齢階層区分とともに掲載されているが、その中のジョクジャカルタ地域を取り出してみると、その総人口は 37,339 人である。ほとんど同じ時期において 2,285 人の違いがあるのは当時の人口報告の信頼性の欠如を示すものの、この時期のジョクジャカルタの人口が 10 万人というレベルでは捉えられぬものであったことを確認するのに役立つ。

ジャワのその他の地域に関しては、JIA には注目すべき数値はほとんどない。Rigg による1847年の旅行記は、スラバヤの82,203人を含む1845年時点のクディリ川沿いの各地域の人口と人口密度を示しているが、これらは、*Tijdschrift voor Neêrland's Indië* (TNI) に掲載されたBleekerの数値に依拠するものである [Rigg J. 1849: 25]。

ジャワ島に隣接するバリ島の人口については、「インド諸島の貿易港」と題する事典的体裁をとる連載記事のバリの項に、バリ島は約100万の人口を有すること、および1平方マイルあたり人口はジャワ島の2倍であることが報ぜられている [Windsor 1850 b: 538]。

ロンボック島については、Zollingerの記述がある。彼は税および軍隊のためにある種のセンサスが行われているに違いないと考えつつも、この種のリストの入手をあきらめて、個人的な情報に基いて、400,000人以上と推定している。この情報は500,000人以上という数が全島人口よりも多いというラジャ自身の発言によって間接的に確認されている。また、武器をとることができる男子の数が80,000人にのぼるというある首長の発言から、これを5倍して400,000人の妥当性を得ている。人口の内訳は、ヨーロッパ人4人、有色ヨーロッパ人1人、華人10人ないし12人、ブギス人5,000人、バリ人20,000人、ササック人380,000人である。さらに、これらの人口の居住地として山脈の北側に40,000人、南部山地に10,000人、平野の西部に220,000人、平野の東部に135,000人という内訳が与えられている [Zollinger 1851: 459]。上述の数値は、40万という概数を得て、それを各構成部分に配分したものとみられ、この時代の人口情報の形式の一つとして注意すべき性格を有している。

1815年に起こったスンバワ島のトンボラ火山の噴火は、ロンボック島の人口を300,000人から20,000人ないし25,000人に減少させたと伝えられる。Zollingerはこの大幅な減少には疑いをもち、もしそうならば1815年以来375,000人の増加があったことになる」と記述している [ibid: 332-333]。

VI スラウェシ島

スラウェシ島（セレベス島）の人口については、Temminckの書物の第3巻からの翻訳が掲載されている。全島人口については6行の記述がある。まず人口300万人という数値が挙げられるが、これが過大評価であるとし、次いでオランダ政府の直接統治地域の1838年の推定人口が僅か410,000人であることが述べられる。そして、Melvill de Carnbée氏の示す全人口1,104,000人が妥当性の高い推定値であるとする [Anonymous 1850-51: 1850, 665]。

Temminckに依拠する人口情報は、スラウェシの各地方にも断片的に及んでいるが、それらは下記の如くである。

- (1) Selayer 1824年人口は、付近の島々を含んで 30,525 人である [Anonymous 1850-51: 1850, 686]。
- (2) ミナハサ 1840年人口は、下記の通りである。ただし奥地の住民を除く [*ibid.*: 1850, 762]。

土 着 民	78,700 人
キリスト教徒	5,687 人
マレー人	2,875 人
華 人	510 人
解放奴隷	500 人
計	88,272 人
Gorontaro (Gorontalo) の諸地域	50,000 人
Sangir 島および Talaut (Talaud) 島	40,000 人
合 計	178,272 人

- (3) スラ諸島 1840年センサスによる人口は、7,630 人である [Anonymous 1851: 251]。
- (4) Buton (Butun) 島 住民数は不明であるが、17 世紀の古文書によるとこの島の人口は 50,000 人であり、また、明らかに大きな誇張を含むが、他の島々を加えた住民数は 500,000 人である [Anonymous 1850-51: 1851, 252]。

Temminck の紹介の外に、蘭領セレベスに関してもう一つの記事が収録されている。それによると、東経120°40' から124°、南緯1°から北緯1°の間に広がるオランダ領の人口は、この地域の広さに比して非常に小さく、住民はあちこちに分散しているので正確な推定をすることは困難であるとしながらも、以下の数値が示されている [Anonymous 1848 a: 673-675]。

Gurontalo (Gorontalo)	24,000 人
Limbotte (Limboto)	12,700 人
Bolangen (Belang)	780 人
Boni (Bone)	650 人
Andagili (Andagileh) および Antingola	350 人
Bolemo (Balama)	300 人
計	38,780 人

官吏が引き上げたため、上記の中には、Prigi (Parigi) および Moutton (Moutong) の人口は含まれていない。Prigi は約 3,000 人、Moutton は 1,750 人を数える [*ibid.*: 676]。

以上に示した断片的な人口記述においては、例えば Gorontaro の諸地域の人口 50,000 人と、Gurontalo の人口 24,000 人とがどのような形で重ね合わされるのかが不明のまま残る。現在では取るに足りない地域に思われる Sangir 島および Talaut (Talaud) 島の人口が、相対的に大きく評価されていることにも注意しておきたい。

VII ボルネオ島

ボルネオの人口に関する情報の主要部分もまた Temminck の書物の第2巻からの翻訳である。ボルネオ本島の人口はきわめて大擲みに 3,000,000 人と推定されるが、この推定値は Temminck 自身によって過大であると考えられている [Temminck 1846-49: II, 428]。

Temminck は、まず 1825 年 11 月 30 日付けのコミッショナー Tobias のメモに従って、西海岸の理事州 (residency) の人口 (ヨーロッパ人を除く) を次のように記載している。

マレー人およびアラブ人	134,946 人
ブギス人	11,360 人
支配下のダヤク人	237,720 人
華人	36,074 人
独立状態にあるダヤク人	80,000 人
計	590,100 人 (原文のまま)

1836 年時点において、この理事州の一部を形成する Pontianak の主要部に関して次の数値が記載されている。ヨーロッパ人 22 人、アラブ人 319 人、マレー人 3,001 人、ブギス人 2,211 人、ダヤク人 13,391 人、華人 17,693 人、計 36,637 人。この理事州に属する Sambas, Succádana (Sukadana), Mátán (Matan), Lándák (Landak), Mámpáwa (Mempawah), および Kápuás (Kapuas) 川, Meláwi (Melawi) 川の流域地方や、各小国の人口はここでは言及されていない [*ibid.*: II, 430]。

南海岸および東海岸理事州を形成する諸地域の人口については、Temminck は 1836, 1837, および 1838 年の行政報告書から、数値を引き出している。これらすべてのデータは単なる推測値 (approximation) であることを断わりながら以下の人口が示されている [*loc. cit.*]。

Banjermassing (Banjarmasin) のスルタンの支配下の諸国	60,000 人
蘭印政府領	40,000 人
Banjermassing (Banjarmasin) の独立ダヤク	500,000 人
Mándáwei (Mendawai), Sámpit (Sampit), および Pámbuán (Pembuan)	45,000 人
Pásir (Pasir), Kuti (Kouti), および Berow (Beraou)	45,000 人
大小のダヤク	40,000 人
Kotoringin (Kotawaringin), Sentáng (Sintang), Dáwi, および Djeli (Djelai)	5,500 人
Págátan (Pagatan), Tánábumbái (Tamahbeamin), Bátulitjin (Batulicin), および Láut (Laut)	1,100 人
沿岸諸島	22,000 人
計	758,600 人

上述の西海岸および東海岸の二つの理事州の合計人口 1,348,700 人（原文のまま）がボルネオ島の 3 分の 2 の面積に居住する。1,650,000 人が残りの 3 分の 1 である北部に居住しなければ、人口総数 3,000,000 人という計算が成立せず、従って 3,000,000 人という推定が過大であるというのが Temminck の立論である [*ibid.*: II, 429]。

Temminck はボルネオの華人に関する若干の推定値にも言及している。1836 年の推定によれば、西海岸諸国の中国人は 130,000 人とされる。また英人 Earl は 150,000 人と見積もり、その内 90,000 人が華人地域に、残りの 60,000 人が蘭領各地に分散しているとする。Montrado の華人首長は Earl に彼の支配下の華人人口は 110,000 人にのぼると語ったが、Earl はこの推定は過大とみなしている。これらの数値は、東印度会社 (the Company) の書類による 30,000 人、Crawfurd の推定値 36,000 人などをはるかに上廻るものである [Anonymous 1848 b: 445]。

ボルネオ北部の人口に関しては、ブルネイの弱体化、サラワクにおける内乱とブルークの介入などを背景に、正確な情報が伝わりにくい状況があったともみられる。ブルネイの人口に関しては、マゼランの航海の際の Pigafetta による 1521 年の記述が、*JIA* では二カ所において引用されている。これらの引用は、町の人口が 25,000 戸（あるいは 25,000 家族）から成立っていることを伝えている [Anonymous 1848 c: 498; Anonymous 1848 d: 523]。

Pigafetta の訪問の僅か 80 年後に Van Noort は戸数を 3,000 と伝え、1636 年には Mandelsloe は 2,000 という戸数を記しているという。18 世紀初頭に、Valentyn は町の外にある多くの家々を除いて、2,000 ないし 3,000 という戸数を数えている。1809 年に、Hunt は家族数 3,000、人口 15,000 人としている [Anonymous 1848 d: 523]。これらの情報は脚注に追加された他の書物からの引用によってさらに混迷したものとなる。すなわち、以前この町に 1、2 年住んだことのあるアルメニア人が、1836 年に、人口 100,000 人（内 20,000 人は奴隷）と伝え、Low は現時点のブルネイ人口を 12,000 人と考えているなどと記載されているからである [*loc. cit.*]。この記事における結論的な見解は、マレー人人口が過去 300 年間ほとんど不変であったとするものである [*ibid.*: 523–524]。

その後、1837 年の実地訪問記が *JIA* に掲載されるが、それによるとボルネオの町は川の湾曲部の水上に立つ 2 列の家屋群からなり、25,000 人の住民を有していた [Lay 1852: 583]。ブルネイと中国との貿易はブルネイに在住する華人コミュニティを成立させていたが、18 世紀末にブルネイの支配者が圧政的、海賊的になったためにブルネイの海外貿易はほとんど消滅し、1809 年には 1 隻のジャンクも来航しない状況が既に数年続いていた。シンガポールが形成された頃、ブルネイの華人は 500 人を越えなかった [Anonymous 1848 e: 615]。このようなブルネイの貿易の変動ないし衰退が事実ならば、ブルネイの人口自体にも相当の変動があったと推定され、少なくとも 3,000 戸無変動説は疑わしいものとなる。

VIII ボルネオ島人口断片

ボルネオ島の人口についてはこの外に、断片的な小地方人口あるいは少数民族に関する記載が *JIA* に散見される。それらは以下の如くである。

キナバル登山にともなう紀行文的な記録の中には、通過したいくつかの集落の戸数が記載されている。例えば補給のために途中で立寄ったイダーン (Idaan) の村 Bungol (Bungal) は全村 120 戸から成り立ち、彼等が接触した集落はその一部を構成して 50 戸ばかりの戸数を有していた [Anonymous 1852 a: 6]。翌日、朝食のために立寄った村は非常に大きく、250 ないし 300 戸以上を有していた [*ibid.*: 7]。これらの記述は通過経路上の村に関するものであって、これらの外にいくつかの集落が遠望されているが、それらの詳細については不明である。報告者は次にキオウ・ダヤクに接触するが、この部族に関しては、戦士数 2,000 人という情報と、この情報が信頼できるという報告者自身の印象が記載されている [*ibid.*: 10]。

Burns はボルネオ北西部のカヤン族の人口に言及し、ボルネオの人口密度が低いことを述べた後に、ルジャン川区 (Rajang Division) については 7,000 人を越えず、バラム川は約 10,000 人と述べている [Burns 1849: 143]。Burns のこの記述に関しては、激しい論調の匿名の反論が数カ月後に *JIA* に掲載されている。その論拠は戦士の数にかかわるものであって、上述の 7,000 人を 6 で割って戦士の数を推定すると 1,160 人 (1,166 人のミスプリントと思われる) となり、このうち 266 人が弱小首長の下にあるとするならば、3 人の有名なカヤンの首長の下にはそれぞれ 300 人の戦士が属するに過ぎない。首長の 1 人である Kum Nipa だけでも、Serebas 攻撃のために 100 艘のボートを提供し得たのであって、1 艘あたり 20 人として、約 2,000 人が彼の支配下にあったと考えられ、上記の 7,000 人は戦士数そのものとされる。Dalton のカヤン人口推定が 270,000 人という数にのぼっていることも援用されている [Anonymous 1849 a: xxxvi-xxxvii]。 *JIA* の編者も Burns の人口数を疑っていることをその注記からうかがうことができる。

バラム川地域に関しては、蒸気船プルートによる遠征の日記が抄録されている。49 の集落の名が 1 人の首長の口から語られ、1 集落 600 人という場合は少なく、多くは 2,000 人以上であるという首長の発言がひかれている。日記の筆者は、マレー人もそうだが、彼等は常に過少に述べ、過大に述べることは決してないと評価している。ちなみに、この会見が行なわれた場所の人口は 1,000 人に過ぎないと言うが、彼自身の計算では少なくとも 2,000 人となるのである [Anonymous 1851 a: 683]。

西ボルネオのカプアス川流域については、2 人のアメリカ人宣教師が 1840 年にシンガポールフリープレスに掲載した旅行記が再録されている。それには下記のような断片的な集落人口

記述が含まれている [Anonymous 1856: 85 – 122]。

- (1) ポンティアナックから 1 時間、左岸に位置する華人集落 Nibong Saribu (Nibong-seribu) は約 500 人の人口を有する。(1840 年 3 月 26 日)
- (2) Teluk Kompei (Telukkumpai) は約 30 戸からなる中国人集落である。(3 月 26 日)
- (3) Sukalanting という約 40 戸のマレー人集落を通過。(3 月 27 日)
- (4) 川中の小島 Pulo Saporoh (Pulau Saporoh) の下流端には 2 戸のマレー人住居があり、15 ないし 20 人が住んでいる。(3 月 29 日)
- (5) 午後、他の川中の小島 Pulo Katipo を過ぎると右岸に 3 戸の小さなダヤクの小屋が見られる。日没時に Jang に着くが、ここにはダヤクの家屋が 3 戸ある。(3 月 29 日)
- (6) 8, 9 戸のマレー人集落があり、支流の上流部には 300 人ないし 400 人からなるダヤクの村がある。これらのダヤクは Tyan (Tayan) の Panambahan (Penambahan=首長のタイトル) の支配下にある。この場所には若干の華人家屋もある。(3 月 30 日)
- (7) マレー人の小集落と Pangeran Jaya の木造の砦がある。彼は、Tyan から南へ半日ないし 3/4 日の Balungei (Belungai) のダヤク 200 人、および Balungei から東へ 1 日の Milian (Meliau) のダヤク 1,300 人を支配しているが、Matan のラジャの代理者に過ぎない。(3 月 30 日)
- (8) Tyan 島 (Pulau Tayan) にはオランダの砦と、オランダ行政官 (Gezaghebber) の住居がある。現在オランダの現地兵 12 人が在留するに過ぎないが、行政官が去る前には約 200 人のマレー人がいた。潮州人および客家からなる 60 ないし 70 人以下の華人集落がある。(3 月 30 日)
- (9) Tyan (Tayan) の集落は 250 人からなり、Panambahan が居住している。700 戸 (lawang), 3,800 ないし 4,000 人のダヤクが彼の支配下にある。(3 月 30 日)
- (10) ダヤクの集落。120 戸 (lawang) を数え、全人口は 600 人を下廻らない。(3 月 31 日)
- (11) 金鉱があり 30 人の中国人が採鉱している。次の金鉱では 10 ないし 15 人。やがて Samarangkei (Semarankai) というマレー人の町に至る。40 戸位だが拡大しつつある。(4 月 2 日)
- (12) Sangau の町。カプアス川左岸に位置し、人口約 3,000 人。3 分の 2 ないし 4 分の 3 はマレー人で、残りは主にブギス人。他に 20 ないし 30 人のダヤク奴隷および華人集落に住む 40 ないし 50 人の華人がいる。Sangau の公司の下の華人の数は、キャプテンの推定では 500 人であり、分散居住して採鉱に従事している。マレーの町の人口推定は極めて困難である。しかるべき地位にある者が必要な情報を提供することが不可能であったり、あるいは提供を望まないからである。家の数が基準として用いられることがある

が、一戸あたりの平均居住人員数が町によって異なるので、これは難点の多い方法である。Sangau の場合、一戸あたり 5, 6 人とすれば（これはポンティアナックその他では妥当な推定なのだが）、実際の半分にも達しないと思われる。Sangau の人口は土着支配者の下にあったときにくらべてずっと少なくなっており、New Brussels とよばれている Succadana (Sukadana) が繁栄している。

Sangau から数日の距離内には 3 部族のダヤクが居住しており、合計 500 戸、約 3,000 人が数えられる。(4 月 4 日)

- (13) Sangau から 2, 3 時間で Pengaladi (Penyeladi) というダヤクの集落に至る。住民数は約 200 人である。(4 月 6 日)
- (14) Scaddan (Sekadau) の華人カピタンによると、Scaddan 在住の華人は 100 人ないし 200 人に過ぎない。この地に在住するスルタンからは支配下の人口に関する情報が得られなかった。Scaddan の町の家数は 70 戸ないし 80 戸で、全人口は約 800 人である。(4 月 8 日)
- (15) Scaddan を出発して最初の休憩地はイスラムに改宗したダヤクの居住地で、10 ないし 12 人が居住している。(4 月 9 日)
- (16) Sungei Ayak (Sungai Ayak) にはスルトンの弟が右岸のマレー人集落に居住している。集落住民は 80 ないし 100 人。対岸の華人集落人口は約 500 人と言われる。(4 月 9 日)
- (17) Sungei Ayak から 8 ないし 10 マイルのところに 2 つの金鉱があり 40 ないし 50 人の鉱夫がいる。(4 月 9 日)
- (18) Spau (Sepauk) にはカプアス川右岸に小マレー集落があり、Sintang のラジャの弟であるパンゲランの住居がある。Spau 川流域にはダヤクの集落がいくつかあり、1,000 人以上が住んでいる。(4 月 9 日)
- (19) Sintang でパンゲランと彼の兄弟に会う。彼等の支配下のダヤクの人口に関する情報を得ようとしたが成功しなかった。彼等はダヤクの数全く知らぬ、どうして数えることができようかという。無知というよりは気乗りがしないという印象を受ける。

Sintang の集落は 90 戸からなり。この外に 30 ないし 40 戸が筏の上に建てられ、また 20 戸がカプアス川東岸に建っている。1 戸あたりの住民数は大きく、おそらく 10 人位である。Sintang にかかわりをもつ華人の全人口はカピタンの推定によれば 120 ないし 130 人である。(4 月 11 日)

- (20) Sintang はカプアス川と Melawi 川の合流点に位置するが、これらの河川の上流部 7, 8 日の範囲内には、集落があつてそれらの総人口は 4,000 人に達するという。カプアス川沿いの重要な集落は、Sintang から 2 日の Silat (Nasilat), さらに 1 日余の

Salimbau, さらに 3, 4 日の Bunut であり, それぞれ 400 人, 1,000 人, 1,000 人のマレー人人口を有する。Salimbau にはダヤクの Manuh 族が居住するが, そのうち約 100 人はイスラムに改宗している。Melawi 川沿いのマレー人人口はカプアス川沿いよりも少なく, 全部でおそらく 1,500 人を越えない。カプアス川および Melawi 川流域にはダヤクが多く, 70,000 人ないし 80,000 人と推定する者もあるし, それ以上と推定する者もある。Sintang のラジャ達の権威は数日の距離にしか達しないが, 最低の見積りで 15,000 人ないし 20,000 人に及ぶ。Bunut の Pangeran Ali の支配範囲は 10,000 人と言われる。(4 月 13 日)

ボルネオ島南部については, パンジェルマシンのダヤクに関する短い記事が *TNI* から翻訳されて掲載されている。人口に関連する事項は下記の通りである。

ダヤクは町を持たず, 多くは 4 ないし 10 戸の小さな集落に居住する。敵襲の恐れのある奥地においてのみ柵をめぐらした集中的な居住形式 (Kotta=Kota と呼ばれる) が見出されるが, このようなコタにはしばしば 1,000 人から 1,500 人が住む。Púlopetak の全人口は約 10,000 人であり, 40 の集落に分かれて住んでいる [Anonymous 1847 b: 34]。

IX スマトラ島人口断片

スマトラ島に関してもいくつかの断片的な人口情報の記載がある。バタク人居住地の南端 Pertibi に関して, 各地域別に集落数と家族数が示されているが, それらは下記の如くである。

(1) Padang Lawas		
a. Batang Onang	4 カンボン	160 家族
b. Pertibi	10 カンボン	315 家族
c. Batang Paneh	7 カンボン	230 家族
d. Kotta Pinang (Kota Pinang)	2 カンボン	100 家族
(2) Dollok		
a. Boekit	9 カンボン	275 家族
b. Simenabon	16 カンボン	606 家族
c. Simassé	4 カンボン	92 家族
d. Tambuski	15 カンボン	262 家族
(3) Burumun		
a. Ayernabara	4 カンボン	140 家族
b. Assahatan	10 カンボン	370 家族
c. Kayuära	2 カンボン	110 家族
(4) Tambusei		
a. Batang Sossa (Batan Sosa)	12 カンボン	775 家族

b. Batang Lobo	13 カンボン	670 家族
c. Pariet	7 カンボン	215 家族
(5) Paneh Suthan Manedar Alam の移民		
(6) Bila Batang Paneh 川河口部, 人口不詳		
上記 2 地方	5 カンボン	300 家族
合 計	120 カンボン	4,620 家族

ここに示された人口は各地域の首長からの情報によるものであるが、夫役や課税をおそれて、彼らの側に話しながらない傾向が認められることが指摘されている。1 家族 5 人とすれば人口は 23,100 人で、これが最少と考えられている。上記の外に奴隷、出小屋、小集落が存在することを考慮して 1 家族 6 人とするならば、約 28,000 人になる。この人口が 300 平方蘭地理マイル、すなわち 4,800 平方英地理マイル (16,461 平方キロメートル) に居住すると、1 平方蘭地理マイルあたり 93 人 (1 平方キロメートルあたり 1.7 人程度に相当) の密度になる [Willer 1849: 367-369]。

Mandheling についても集落数と世帯数が示されている。

(1) Great Mandheling		
a. Kotta Siantar	43 カンボン	3,221 世帯
b. Penyabungan	20 カンボン	1,172 世帯
(2) Little Mandheling		
a. Sing-ing-u	7 カンボン	564 世帯
b. Tambangan	11 カンボン	794 世帯
c. Tamiang	7 カンボン	574 世帯
d. Menambin	11 カンボン	1,021 世帯
(3) Ulu		
a. Pinyonghei	5 カンボン	102 世帯
b. Simpan Mendampa	6 カンボン	249 世帯
c. Batang Gadis	13 カンボン	351 世帯
(4) Pakantan		
a. Pakantan-Lomba	8 カンボン	474 世帯
b. Kotta Bukit	1 カンボン	317 世帯
(5) Ankola		
a. Ankola Mudik	15 カンボン	719 世帯
b. Ankola Jai	24 カンボン	638 世帯
c. Sipirok	26 カンボン	916 世帯
合 計	197 カンボン	11,112 世帯

Mandheling の数値は Pertibi よりもいくらか正確であり、また奴隷の多くが独立居住しているので、1 家族は 5 人以上とはみなすことができない。このようにして、55,000 人ないし最

大 60,000 人の人口が推定されている [ibid.: 371 – 372]。

パスマ地方については、Presgrave の 1817 年の旅行記からの再録が、断片的な人口情報を伝えている。Pasummah Ulu Manna の集落数は 22 と伝えられ、通過した集落の観察から 1 集落は平均 30 戸から成るとして、1 戸 8 人とみなすと、人口は約 5,200 人になる [Presgrave 1858: 9]。Gunung Agung の集落は、これまでに見たどの集落よりも大きく、80 戸を有している [ibid.: 10]。Pasummah Lebar は 4 人の首長 (pasirah) によって統治されているが、集落の数は 800 と 500 とも言われる。これらの数は多過ぎると考えられ、300 という数が現実にはひどく食い違わないものと考えられる。通過した約 30 の集落の戸数から、平均 45 戸とみなし、1 戸あたり 8 人とすると、全人口は 10 万人以上ということになる [ibid.: 46]。

スマトラ島南部のランボン地方については、センサス結果が、郡およびさらに小さい地域単位別に、男女別に成人と子供を区分して示されている (表 13 参照)。人口総数は 82,905 人である [Anonymous 1851 b: 698]。ランボン地方に隣接するラナウの人口についても、1820 年の旅行記が再録され [Pattullo 1858]、ラナウ湖周辺と Lewah の人口表が、それぞれドゥスン毎に示されている (表 14 参照)。これらの数値は誤植あるいは計算間違いを含む上に、成長した男子 (Grown up Males)、成人男子 (Male Adults)、成長した女子 (Grown up Females)、成人女子 (Female Adults) という意味不明の区分が行われている。また、前掲のランボン地方とは逆に、男子が女子よりも多く、とくにラナウ湖周辺では性比が 1.38 を示すなど、慎重な考慮を要する数値を含んでいる。しかし、家数と人口が示されるなど貴重な情報も含まれている。ラナウ湖周辺の総人口は 1,584 人、Lewah の総人口は 1,499 人と記されているが、後者については、住民が焼畑に散在しているので、Lewah の完全な人口を得るためには、約 500 人が加えられてもよいと Pattullo が注記していることは示唆的である [ibid.: 294]。ラナウ地方の人口は約 3,000 人であることが、1849 年の短い記事に書かれている [Anonymous 1849 b: 534]。

表 13 ランボン人口

郡	男	少年	女	少女	計
Samangka	2,337	3,736	2,507	3,426	12,006
Telok Betong	3,423	4,829	3,824	4,616	16,690
Sekampong	1,576	2,723	1,910	2,631	8,840
Maringie	326	544	421	509	1,800
Seputi	3,137	3,756	4,373	2,852	14,118
Tulong Bawang	5,132	9,145	7,976	7,197	29,450
計	15,931	24,733	21,011	21,229	82,905

出所：Zollinger [1851: 698] より抄出。

表 14 ラナウ湖周辺地域の人口

	No. of Houses	No. of Married Persons	No. of Grown up Males	No. of Grown up Females	No. of Male Adults	No. of Female Adults	Total
(ラナウ湖周辺)							
Lumbo	10	10	36	23	15	13	97
Ranaw	14	2	26	18	24	12	80
Surabaya	9	33	72	51	34	30	187
Banding Auging	17	42	76	70	44	40	280
Suhubye, Padang Rattoo, Ungkusa, Pila, Gadong	51	125	260	205	170	75	710
Warku	14	30	46	48	38	22	144
Tanjong Jati	13	28	45	38	32	21	136
計	128	480	561	453	357	213	1,584
(Lewah)							
Bumi Agong	10	50	50	56	31	30	167
Surabaya	7	18	31	21	14	8	74
Kasugihan	11	32	44	56	32	25	157
Paggar	9	15	20	21	20	31	92
Nagri	12	54	60	60	40	58	218
Perwatta	5	23	29	28	10	15	82
Banding	5	16	23	27	23	17	90
Waye Mengaku	5	16	16	18	17	15	65
Tanjung	3	7	7	9	8	6	30
Gadong	21	50	71	61	40	30	202
Sungie	19	20	52	62	50	23	187
Genting	10	25	37	38	26	23	124
計	117	306	440	457	311	270	1,499

出所：Patullo [1858: 293-294] による。地域名，人口区分，数値は原文のまま。

X 島々の人口断片

島々の人口については断片的な情報が得られる。ここではそれらを西から東へとむかって羅列することにする。

ニコバル諸島は8,000人以上の人口を有し，このうち2,000人がCarniobar (Car Nicobar) 島に居住する。Theressa (Teressa) 島の人口は約500人である [Chopard 1849: 271]。

Mergui 諸島については，Silong 族の人数が，1,000人を越えないという記述がある [Logan 1850: 411]。

Baniak 諸島のMoruwi 族の人口は354人を越えず，1平方マイルあたり約3人であって，ムンタワイ島よりも低密度である。この総数のうち231人がTuwanku 島に住み，主としてTuwanku 湾に集中している。家数と人口の分布は次の通りである [Logan 1856: 9-10]。

坪内：19 世紀中葉の東南アジアの人口

Tuwanku 島		
Kampong Tuwanku	5 戸	23 人
Kampong Talalu	15 戸	86 人
Kampong Sirohi	9 戸	67 人
Kampong Rautan	4 戸	19 人
Ladang Tuwanku	7 戸	19 人
Ladang Pangulu	6 戸	17 人
Ladang Asaluan	6 戸	20 人
計	52 戸	231 人 (原文のまま)
Simoh (Simak) 島	4 戸	4 人
Lamun 島	3 戸	6 人
Tailana 島	1 戸	2 人
Laraga 島	1 戸	2 人
Arungan (Orongan) 島	1 戸	2 人
Matahari 島	1 戸	4 人
Bahlong (Balong) 島	2 戸	2 人
Sikandang 島	3 戸	7 人
Mayla 島	1 戸	3 人
Laurat (Laureh) 島	2 戸	6 人
Balambak Gadang (Palambak-besar) 島	4 戸	9 人
Rangit Gadang (Rangit-besar) 島	5 戸	12 人
Rangit Kichil (Rangit-kecil) 島	3 戸	5 人
Panjang 島	2 戸	3 人
Bahgu (Bagu) 島	2 戸	4 人
Bale (Balek) 島	9 戸	26 人
Ujong Batu (Ujungbabu) 島	2 戸	6 人

スマトラ本島の西側に位置するムンタワイ (Mantawe = Mentawai) 諸島の人口は約 11,000 人と記され [Logan 1855: 284], 小はシベルート (Siberut) 島 Telolagu の 40 人から、大は同じ島の Tepeket の 1,400 人に至る 34 の地域の人口が表示されている (表 15)。

Banka (Bangka) 島については全島人口の記述はなく, *TNI* (1846) からの翻訳として, 過去数年多くの華人が中国から渡来し, 現在, 華人人口は 10,000 人以上に達し, 全人口の 3 分の 1 を占めるという間接的な表現が見出されるのみである [Anonymous 1851 c: 276]。島内の Minto の町の 1813 年 7 月末の家数は 357 戸で, 住民は 1,546 人であるという記述が別の報告に記されている [Horsfield 1848: 377]。

マレー半島東海岸沖に位置する Aur (Aor) 島は長さ 3 マイル, 幅 1.5 マイル強の広さに過ぎないが, 1,400 人の住民がいる [Anonymous 1850: 192]。

ジャワ島のスラバヤ沖の Bawean 島についても, *TNI* (1846) からの翻訳がある。この島は, Sankapura, Kulon Negerie, Wettan Negerie の 3 郡から成っている。Sankapura は 17

表 15 ムンタワイ諸島人口

島・地域	人口	島・地域	人口
Siberut		N. Pogy	
Tepeket	1,400	Simenganyo	200
Sibirisiget	700	Simengaia	400
Matalu	800	Tekaoete	50
Sibelubet	600	Tekako	400
Sibapachat	500	Bakutmonga	50
Teleleu	500	Silabu	200
Telolagu	40	計	1,300
Katorei	450	S. Pogy	
Siberut	400	Silabanya	200
Seibie	650	Timabuko	50
Sembungan	300	Simalakoba	100
Sibeluat	350	Simagalo	250
Tasiliebat	400	Timabobo	500
計	7,090	Telobulei	150
Pora		計	1,250
Sibirribenua	150	合計	11,090
Sibirriulan	200		
Sibesua	100		
Sikichi	50		
Sibarau	200		
Seoban	100		
Telaoinan	300		
Pora	150		
Simatobbe	200		
計	1,450		

出所：Logan [1855: 284] による。
地名等は原文のまま。

集落 (campong=kampung), 6,770 人, Kulon Negerie は 26 集落 (dessa=desa), 2,881 戸, 11,826 人, Wettan Negerie は 21 集落 (dessa), 2,308 戸, 10,525 人を有する。総人口は, 1845 年センサスによると, ヨーロッパ人およびその子孫 38 人, 華人 50 人, Baweans 27,224 人, マレー人 426 人, マドゥラ人およびブギス人 1,393 人から成り立っている [Anonymous 1851 d: 389-392]。この島の人口については, *JIA* の他の 2 つの箇所においても, 約 30,000 人と記載されている [Anonymous 1851 e: 616; Bleeker 1859: 59]。

Banda 諸島の人口は, 6,500 人に過ぎず, 大部分はジャワ島からの罪人である。ポルトガル人がはじめてこの島に来たときには, 少なくとも 9 人の王がいて, 24,000 人の土着人口があったという [Oxley 1856: 139]。

Amboyna (Amboina) 島は約 30,000 人の住民を有し, その 4 分の 1 は首邑およびその郊外に居住する [Windsor 1850: 382]。

Ceram Laut (Seram Laut) 諸島に含まれる小島の一つ Kaliwaroo 島については, シンガポールフリープレス紙の 1836 年 10 月 6 日の記事が再掲されている。大きな町や広い地域に関して住民が言うことは信頼できないが, Ceram Laut 諸島のようなところでは, 彼らの推定は

一般により正確であると断った上で、Kaliworoo 島人口が 100 戸、1,000 人であることが述べられている [Anonymous 1852 b: 689]。

Arru (Aru) 諸島および Kei (Kai) 諸島についてはつぎのような記述が見出だされる。Ki (Kai) 諸島の人口は 8,000 人ないし 10,000 人である [Anonymous 1853 b: 71]。西部の諸島の居住は希薄であって、Wama (Wamar) 島は周囲がほとんど 40 マイルもあるにもかかわらず、200 人ないし 300 人を含むに過ぎない。彼らは海岸沿いに 6 戸くらいの小村を形成して分散している。東部の諸島の居住密度はより高い [loc. cit.]。

XI その他の地域

東南アジア島嶼部では、冒頭の東インド諸島の人口を論じた St. John による補遺として、フィリピンに関して 1846 年センサスを基礎にした人口統計が掲載されている。33 に区分された province の人口の合計 3,431,183 人に、マリアナ諸島人口、白人人口、華人人口等を加えて 3,652,394 人としたうえで、さらに 2 年間の増加分 290,234 人を加算し、3,942,628 人を得ている。これに、なんらかの理由で税を徴収されない者および奥地の少数民族 (wild tribes) の合計 1,000,000 人、Mindanao および Basilan の推計人口 1,000,000 人を加えて、フィリピンの総人口 5,942,628 人が示されている。Province 別の表に記された Zamboanga は Babianes の間違いであり、その人口もまたミスプリントであるが、誤差は取るに足らないと注記されている [St. John 1849: 721–722]。追加された 2,000,000 人という数値のきめの荒さと、1 桁まで記載された province 別人口が、奇妙な対照を示しており、当時のフィリピンについて外国人が得た情報はこの程度であることを示していて興味深い。

フィリピンについては上記の外に見るべき情報はほとんどない。ルソン島の南東端にある Albay の町の人口が約 13,000 人であること [Anonymous 1850 b: 380]、ミンドロ島においては、海賊の跳梁のためにかつては多かった人口が四散し、ようやく若干の町が他の province からのキリスト教徒の移民によって形成されるに至ったが、徴税人口は 2,000 人に過ぎないこと、少数民族 (wild tribes) の数は 6,000 人以上に達すること [Anonymous 1849 c: 757–758]、ルソン島のスペイン人支配下の少数民族ネグリティの数が約 3,000 人であること [Crawfurd 1848: 187]、等を含む断片的な記述があるにすぎない。

東南アジア大陸部については、JIA にあらわれた情報は断片的である。Le Fevre は、コーチシナに関してその人口を正確に知ることは難しいが、コーチシナ人の数は 13,000,000 人と言っても大きな間違いはないであろうと記し、その外に約 3,000,000 人の少数民族 (barbarians) および従属しているカンボジア人がいるので、総数は 16,000,000 人になると述べている [Le Fevre 1847: 59]。カンボジアについては、旅行記の中に、Udong の人口が約 10,000 人

で、主としてカンボジア人からなり、若干のシャム人、コーチシナ人および中国人がいるという記述があるのみである [Anonymous 1851 f: 437]。

ビルマについては、赤カレン族の人口の推定がなされている。彼らの居住地域は7,200平方マイルにわたり、その4分の3を占める東部と、4分の1を占める西部に区分されるが、東部には92の集落に7,360戸の家があり、1戸あたり5人として36,800人である。西部では集落規模はより大きく、人口密度も高く、1,200以上の集落に36,000戸が含まれ、1戸あたり5人として180,000人になる。合計人口は216,800人となり、その3分の1は奴隷である [O'Riley 1859: 4-5]。

東南アジア地域以外については、JIAの記述は皆無ではないが、より分散的かつ断片的になる。これらの中には、オーストラリア原住民の人口表 [Westgarth 1851: 付表]、マウリティウスやセイロンへのインド人移民に関する統計 [Windsor 1863: 180-181; Rigg C. R. 1852: 126] 等を含むが、ここでは詳しい紹介は行なわない。

XII 付 論

J. H. Moor: *Notices of the Indian Archipelago, and Adjacent Countries* における人口情報

LoganによるJIAの発行に先立って、*Singapore Chronicle* 誌の編集者であったJ. H. Moorは、*Notices of the Indian Archipelago, and Adjacent Countries* と題した大部の書物を、1837年にシンガポールで編集刊行している。この書物は、1824年から1834年の間に*Singapore Chronicle* に掲載された情報を中心にして、当時の東南アジア諸地域の情報を収録することによって成り立っており、ボルネオ、セレベス、バリ、ジャワ、スマトラ、ニアス、フィリピン諸島、スル諸島、シャム、コーチシナ、マレー半島などの情報を含んでいる。以下、本論を補足する意味で、この書物に記載された人口に関する記事を紹介するとともに、JIAにおける情報との性質の違いについても触れることにしよう。

(1) ボルネオ

ボルネオ島北西海岸州（現在の西カリマンタン）については、1827年の記事が再録されて、その中に人口に関する記述が若干含まれている (pp. 8-)。同州の総人口は400,000人を越えないと推定されている。もっとも多いのはダヤ (Daya) で、200,000人、ついで華人である。華人人口は、35,000人 (男子数) を越えないとするものから、72,000人 (男子数) に達すると推定するものまであり、この記事では50,000人としている。彼らの大部分は結婚していないので、妻子を含めた華人人口の総数は125,000人と推定されている。彼らは主として、Orang Khèと呼ばれる広東州からの移民および土地のダヤの女性との間に生まれた子孫から成り

立っている。以前は年3,000人の華人が到着したが、最近では政情不安のためその3分の1を越えない。マレー人 (Melayu) の人口は約60,000人と推定されている。ブギス人 (Ugi) の人口は5,000人で大部分がポンティアナックに住む。アラブ人およびその子孫は約600人、インド人は50人を越えない。

西ボルネオの若干の地方については、巻末の付録に次のような情報がある。Sambas 地方には、30,000人の華人がおり、ラジャによって課せられた金鉱の借料を無視するほど強力である。そこには、その外に12,000人のマレー人とダヤク (=ダヤ) 人がいる。Salako には20,000人の華人がいる。Mantrado (Monterado) はマレー人独立首長の下にあり、ダヤク人、マレー人、華人を合計した人口を50,000人と見積もる場合もあるが、その半分以上が真実に近いと思われる。Songo (Sanggau) はマレー人独立首長の下にあり、ダヤと若干の華人からなる人口は25,000人である。Matan の首長の下には10,000人のダヤ人と若干の中国人およびマレー人がいる。ダイヤモンド鉱山があるLanda (Landak) の山には、少なくとも30,000人が住むが、主としてダヤ人で、採鉱および農業に従事している (Appendix pp. 18-19)。ポンティアナックの町の全人口は約7,000人で、華人集落は約2,000人を含む。他にブギス人集落およびマレー人集落があるが、ここにはダヤ人はいない (Appendix p. 25)。ポンティアナックのスルタン支配の第二の港 Monpawa (Mempawah) の人口は7,000人で、マレー人、ブギス人、ダヤ人、および2,000人の華人から成り立っている (Appendix p. 26)。

Valentynによると、18世紀初頭において、Succadana (Sukadana) は600戸近くから成っていた (p. 99)。Radermacherによると、1780年時点でMampawaは1,000戸ないし2,000戸を有していた。1772年にMampawaとSambasの間で両地の中間にあるMonteradoとSalakan (Salakau) の領有をめぐる戦争があった。これらの2つの集落には30,000に近い華人が住み、砂金の産出が多い (pp. 100-101)。1770年に設立されたポンティアナックの町とその周辺には、マレー人3,000人、ブギス人1,000人、アラブ人100人、華人10,000人が居住している。これらの自由民の外にかなりの数の奴隷がおり、その多くはジャワ人である (p. 105)。

本篇では、上述の西カリマンタンに関する情報に続いて、ダルトン (Dalton) による紀行が数篇再掲され、その中に人口に関する若干の記録が含まれている。ダルトンの記述はボルネオ各地に及んでいるが、とくにクティを中心とするボルネオ島南部にかかわるものが多い。ダルトンによって最初に言及されるのは、Pergottan の人口である。最大の推定値は、女子を含んで11,000人であるが、ラジャの役人の語る数値は7,800人である。実際の値はこれらの中間にあって、約9,000人であろうと推定されている (p. 21)。

クティに関しては、マハカム川 (Coti River と書かれている) を遡行したダルトンの旅行記 (1831年) の中に人口に関するいくつかの断片的な数値を見出すことができる。たとえば、

Semerindan (Samarinda) の集落は、主としてブギス人からなる 500 人の人口を擁している (p. 35)。この川を遡行していくと、60 戸の集落 Tambong Tolong などを経て、約 3,000 人の人口をもつ Markammon (Muarakamon) に至る。さらに上流の Cota Bangon (Kotabangun) の人口は約 4,000 人であるが、男子の大部分は Sedgen との戦争のためにスルタンに召集されてより上流の Marpaw (Muarapahu) に出向いており、女子と子供だけが残っていた。Marpaw には 3,000 人が居住しているが、その 3 分の 2 はダヤクである。このあたりには、106 人のダヤクの首長 (Rajahs) がおり、それぞれが支配下に 300 ないし 1,000 人の男子を有している (pp. 36-39)。

ダルトン (Diaks) がボルネオ島およびセレベス島のかなりの部分にわたって居住していると考えている。Waagoo (セレベスの Wajo とみなされる) のラジャは配下に 70 人の首長をもち、その各々もまたラジャと呼ばれている。Sedgen は 50 人、Selgie は 150 人以上の配下の首長を有している。Selgie は最大の首長の一人であり、150,000 人が彼の勢力下であり、少なくとも 12,000 人の戦士を動員することができる (pp. 48-50)。

Semerindan (Samarinda) のブギス集落の近辺には多くのダヤクが居住するが、Samarinda 付近の住民の総数は 5,500 人と推定しても多過ぎることではない。危険が迫ると 1,000 人の戦士をだすことができるが、危機存亡の事態においてはその倍を動員することができるという (p. 68)。

ボルネオ島の人口に関しては、巻末の付録にも若干の情報がある。Pigofetta によれば、ボルネオの町には 25,000 の家屋があったというが、1809 年には家屋数は 3,000 もなく、全国の華人数は 6,000 人に過ぎない (Appendix p. 14)。また別の個所で、ボルネオの町は川のなかの約 3,000 戸の杭上家屋から成り立ち、華人、マレー人、ムルート (Morut) 人など、15,000 人の人口を有していると書かれている (Appendix p. 27)。

ボルネオ島に関しては、巻末の付録ではさらに Leyden による記述が収められている。人口に関係する数値をとまなう地名は以下の通りである。ボルネオの町は、Valentyn の時代には 4,000 戸近くから成り立っていた (Appendix p. 94)。Tampasak は約 200 戸からなる (Appendix p. 95)。Tirun あるいは Tedong の北境 Sibocu (Sibuku) 川には 30 の集落 (campongs) があり、1,000 人が住む。Lidong 川 (あるいは Lilidong 川) には、10,000 人の住民がいると Sulu 人達は推定している (Appendix p. 96)。Passir (Pasir) はワジョのブギス人のコロニーで、同名の川を 45 マイル遡ったところにあり、主としてブギス人 300 戸から成っている (Appendix p. 97)。1720 年頃のバンジェルマシンのイスラム教徒人口は、Valentyn によれば約 7,000 人で、Radermacher によれば 1780 年の人口は 8,500 人にのぼった。人口はジャワ人、マカッサル人、ブギス人、およびジョホール、ミナンカバウ、パレンバンのマレー人の混合であり、この内ではジャワ人がもっとも多い (Appendix p. 97)。湾の東

側に位置する Tabanyan (Tabanio) は小さい集落で 250 人を有する。この近くには次の集落がある。Moluk 200 人, Blanang 100 人, Tambabgan 80 人, Takisong 50 人 (Appendix p. 98)。

Radermacher によると、1780 年におけるバンジャル川沿いのイスラム集落は以下のごとくであった。Kayu-tangi 200 人, Banjarmassing (Tatas) 2,000 人, Martapura (Bumi Kinchara) 1,800 人, Cohin (Old Banjar) 100 人, Bekrompi および Lusong 500 人, Pamanki 100 人, Brambang 80 人, Moerabahan (Marabahan) 50 人, Sungey-benar 40 人, Labuan-mas 60 人, Taping 100 人, Nagara (Negara) 550 人, Benois Ampat 90 人, Kalyong Campong 200 人, Amonty (Amuntai) 520 人, Calona 120 人, Manapang 120 人 (Appendix p. 98)。バンジャルの人口の大部分はイスラム教徒ではなく、ダヤク人である (Appendix p. 98)。

(2) セレベス

セレベス島についても、ダルトンの 1831 年の旅行記が再掲されており、その中に人口に関するきわめて断片的な情報が見出される。最初にマカッサルに関する記述があるが、そこには人口に関する言及はない。次に Mamoodjoo (Mamujo) に関する記事の中で、Mamoodjoo の集落が少なくとも 2,500 家族を有しているという記述がある (p. 75)。Mamoodjoo には少なくとも 40 人を上回るラジャがおり、それぞれ奥地に支配地をもっている (p. 77)。

(3) フィリピン

フィリピンについては、1820 年にマニラで刊行された、1818 年および 19 年の統計が抜粋されている。主な数値は以下のとおりである。フィリピンの全人口は 2,249,852 人で、このうち 1,376,422 人がルソン島に住んでいる。次いで住民が多いのはパナイ島の 292,760 人で、その外にセブ島 108,426 人, サマール島 57,922 人, レイテ島 40,623 人, ネグロス島 35,444 人, ミンダナオ島 50,823 人, マリアナ諸島 5,349 人などの人口が示されている。ヨーロッパ人の総数は 2,837 人, 有色人種 (People of color) 6,170 人, 華人 6,201 人であった。1805 年における原住民人口は 1,789,205 人, 1815 年には 1,927,830 人であった。また、1818 年の統計によると、全人口に対する結婚数は 1 対 93, 出生数は 1 対 27, 死亡数は 1 対 47 であった。ただしマニラの町では全人口に対する死亡数は 1 対 27 となっていた (p. 79)。

スールー諸島の人口については、付録に若干の記述がみられる。J. Hunt は以下のことを記している。Sulo (Sulu) 諸島の人口は、多くのガゼットニアにおいて、60,000 人と推定されているが、現在著しく増加中である。スルタンの帳簿からとった 200,000 人という記述は、過大評価というよりは過小評価である。首邑には 3,500 戸の住家があり、6,000 人のイスラム教

徒と 800 人の華人が住んでいる。それ以上の人口が数えられないのは、常に住民の半数以上が商業航海、真珠や海鼠の採集、海燕の巣の採取などに出ているからである。以上の記述に続いて、首邑を含む 62 の集落の名とそれぞれの主要産物が挙げられ、これらのうち 3 つの集落を除いて、小は 60 人、大は 15,000 人に至る各集落の人口概数が挙げられている。これらの合計は 149,370 人である（実際に計算すると 161,970 人となり、この数と異なっている）。この他に東部の集落の名と人口は不明であり、これらを合わせると 200,000 人になる（Appendix p. 42）。

スールーのスルタンから英国に割譲された最初の港 Kimanis には 35,000 人のイダン人（Idan）が住んでいる（Appendix p. 28）。

スールーの関連地域としてボルネオ東部の町や地方や島についての情報の中には、ごく一部については人口数の記述をとまなう場合がある。それらは以下の通りである。Kenibatangan の町の人口は、30 人のイスラム教徒と 100 人のイダン人（Orang Idan）から成り立っているが、さらに上流に遡ると、イダン人の大きな村（negri）が多くある。膨大な人口がある。Sabahan には 1,000 人のイスラム教徒と 800 人のイダン人および土着民（cafirs）がいる。Tidong には 2,000 人のイスラム教徒と源流に至る上流部の数え切れぬ村に住むイダン人の膨大な人口がある。Kuran には 3,000 人のブギス人、500 人のマレー人、10 人の華人に加えて、村むらに膨大な数のイダン人がいる。Pinikund（Pinangar）には、1,000 人のイスラム教徒、200 人のイダン人がいる。Munkindra は、2,000 人のイスラム教徒および 500 人のイダン人を有する（Appendix pp. 55-57）。Tawi Tawi はスールー諸島で三番目に大きな島であるが、800 人のイスラム教徒が住む。彼らの多くは Datu Mulut Mondorasa および Datu Adnan の奴隷である。

（４） ティモール島その他

ティモール島については、人口について何らの考えを示すことができないと書かれている。住民数は島の内部および南海岸に多いが、北海岸には集落が少ない（Appendix p. 8）。ロティ島、サブ（Savu）島、ソロール（Solor）島については短い紹介があるものの人口数は示されていない（Appendix pp. 9-12）。

（５） バリ島

バリ島は 8 つの国から成り立っているが、1830 年の記事の冒頭にそれぞれの人口が示されている。（i）Baliling（Buleleng；Dambarana=Jembrana を含む）60,000 ないし 80,000 人。（ii）Carang-Assam（Karangasem）Baliling とほぼ同じ。（iii）Kalong-Kong（Klungkung）前二者よりも少ない。（iv）Gianjer（Gianyar）さまざまな推定があるが、中間的なものは約 10,000 人。（v）Badong 約 100,000 人。（vi）Bangli 20,000 ないし 30,000 人。

(vii) Man Oei (Mengoewi) 約 150,000 人。(viii) Tabanan 200,000 人。かくして、バリ島の全人口は約 700,000 人である (pp. 85–86)。

(6) スマトラ島

ジャンビ (Jambie=Jambi) は貧しいとるに足らぬ国である。首邑の Tanahpileh は、400 の人口を有し、その中にアラブ人 50 家族を含んでいる。華人あるいはコロマンデル海岸人はいない。インドラギリ (Indragiri) はジャンビよりもなお小さい。シアク (Siak) はスマトラ北岸で最大の国であるが、シアクの町は 300 戸に達しない (pp. 97–98)。ミナンカバウ地域では首邑パガルユン (Pagaruyong) を中心とする半径 50 マイルの人口は、100 万を下らない (p. 102)。バタックに関しては、付録で、塩の消費量が莫大であるところから推測して、人口の多さが指摘されているが、具体的な人口量は示されていない (Appendix p. 1)。

(7) ジャワ島

ジャワ島の人口については、1825 年の同島における反乱に関する一連の記事の中に、50,000 弱の住民を有し、同島での二番目の大きさの町スマラン (Samarang) が最悪の状態にあると述べた個所が見出されるのみである (p. 149)。

(8) マレー半島

マレー半島については 1834 年の Newbold によるものを含む数篇の記事が再掲され、若干の個所で人口に関する言及がある。ケダー (Queda=Kedah) については、シャムの侵攻以前には、105 の教区に分けられて、40,000 ないし 50,000 の人口を有していたとみなされる。1820 年にこの国を訪ねた Beauliau 提督の情報を信頼するならば、彼の来訪の 7 年前には人口は 60,000 人であった。その時流行した疫病が全人口の 3 分の 2 にあたる 40,000 人の命を奪ったからである。ケダーの原住民はマレー人、サムサム人 (Samsams), シャム人, およびセマンであるが、主に前二者から成り立っている。サムサムはイスラムに改宗し、これらの二種類の言語の混じったものを話すシャム人である (p. 242)。

ペラクは 105 のムキム (mukim) からなり、ケダーと同じくらいの人口を有するといわれる (p. 243)。スランゴールは、マレー諸国の中で、資源、人口ともに最小であるが、近年では豊富な錫鉱のために注目されはじめた (p. 243)。マラカは 1822 年のセンサスによれば、町を含んで 22,000 人を下回る住民を有している (p. 244)。

内陸の小国ルンバウ (Rumbowe=Rembau) については、若干の記述はあるものの、人口数の記載はない (p. 244)。パハンの人口は 50,000 人を越えるといわれる。トレンガヌの人口は、華人を含んで 35,000 人にのぼり、35 のムキムに分かれている。クランタンはトレンガヌ

よりも大きく、人口もより多い。50のムキムを含み、人口は華人を除いて50,000人である。パハン、トレンガヌ、クランタンの三国では、15,000人の華人が採金の仕事に従事しているとされる(p. 244-245)。パタニはマレー半島で最大の国であり、最多の人口を有する(p. 245)。

当時既に英国の支配下にあったナニンに関しては、Newboldによる記事が掲載されている。1829年のセンサスによると、ナニンの人口は3,458人で、うち1,800人が武器をとることができる。家数は911戸である(p. 249)。この記事に続いて、同じ筆者による1834年のミナンカバウ系の9つの小国に関する2つの記事が掲載されている。人口数が記載されているのは、次の2つのみである。ジェルブ(Jellaboo=Jelebu)は7つのムキムに分かれており、人口は原住民を除いて3,750人、また、スリムナンティの人口は8,000人と推定されている(p. 260)。

巻末の付録には、現在のヌグリスンビラン州の小国やマレー半島の諸国に関するNewboldなどによる記述がかなりのページ数を割いて掲載されている。人口に関する情報は次の通りである。

ルンバウの人口は、Kroh (Keroh) および Tampin を含んで約9,000人である。主な地名は、Bandar, Sempang (Simpang), Chembong, Kaling (Keling) および Battu Ampar (Batu Hampar) である。Chembong およびその周辺には900戸の家屋があるといわれる(Appendix p. 62)。Johole (Johol) の人口は2,000人と推定され、3つのムキムに分かれている(Appendix p. 69)。ペラクの人口は、原住民を除いて、おおよそ35,000人のマレー人、および若干の華人、アラブ人、Chuliah 人から成っている(p. 72)。ムアル(Muar)の人口は2,400人を越えない。これは面積に比して極端に少ないが、ジョホールのスルタンの失政と無力により、小首長間の戦争が絶えず、農業や商業に従事する者の多くが土地を放棄したからである(p. 73)。スンガイウジョン(Sungie Ujong=Sungai Ujung)の1832年の人口は、主としてミナンカバウ系の3,200人のマレー人と、400人の華人から成り立っていたが、後者の多くは1833年の暴動後、マラカに逃げてしまった。1828年時点では錫鉱で働く華人は1,000人近くに上り、9つの公司に分かれていた。1828年のマレー人による虐殺後、1830年には400人がそこで再び働くようになっていたのである(p. 78)。

マレー半島の東海岸および西海岸の諸国の人口は、その境界となる地名とともに列挙されている。それらは下記の通りである(p. 87)。

ケダー(Quédah=Kedah) Trang 川から Krian (Kerian) に至る。人口 25,000 人。

ペラク(Pérak=Perak) Krian から Rúnkúp に至る。人口 35,000 人。

スランゴール(Salangóre=Selangor) Rúnkúp (Rungkup) から Lingie (Linggi) に至る。人口 12,000 人。

マラカ(Malacca=Melaka) Lingie から Cassang (Kasang) に至る。人口 34,333 人

(1833－1834 年)

ジョホール (Johóre = Johor) Cassang から東海岸の Sidilly (Sedili) に至る。人口 25,000 人。

パハン (Pahang) Sidilly から Kemámang (Kemaman) に至る。人口 40,000 人。

クママン (Kemámang = Kemaman) 川に沿って 1～2 マイルに位置しており、海岸沿いに領土はない。人口 1,000 人。

トレンガヌ (Tringánu = Trengganu) Kemámang から Basut (Besut) に至る。人口 30,000 人。

クランタン (Calántan = Kelantan) Basut から Barúna に至る。人口 50,000 人。

パタニ (Patáni = Patani) Barúna から北緯 7°20′ に至る。人口 54,000 人。

ペナン (Pinang) 人口 40,032 人 (1833 年)。

プロビンス・ウェルズレイ (Province Wellesley) 人口 49,553 人 (1833 年)。

シンガポール 人口 26,392 人 (1834 年)。

(9) 東南アジア大陸部の諸国

ビルマ帝国 (Birman empire) の面積は 212,000 平方マイル、コーチシナは 93,000 平方マイル、シャムは 258,000 平方マイル以上と推定されている。人口に関しては誇張があったことが多く、サイムズ大佐 (Colonel Symes) は、ビルマ帝国の人口を 1,700 万人としたが、この推定値は後に 800 万人まで減らされた。近年ではさらに 300 万人まで引き下ろそうとする傾向がある。或るフランス人は 1812 年時点でコーチシナ帝国の人口を 2,300 万人と推定したが、これも過大評価であろう。シャムの人口の大まかな推定は 5,000,000 人をやや上回るが、同じ人口密度を有するならば、ビルマ帝国は 4,000,000 人余というところであろう。コーチシナについては、人口密度はより高いと考えられている (1824 年 8 月, pp. 194－195)。

1825 年の記事として次のことが再掲されている。シャムの首都バンコクの人口は、150,000 人と伝えられているが、この数値は過大評価であろう。これが城壁内の人口だとすれば実際の 4 倍ほど多すぎるし、城壁外人口を含むならば 4 分の 1 くらいで少なすぎる。また、バンコクの人口の 2 分の 1 は華人であるといわれる (pp. 198－199)。

上記に続くシャムに関する紹介記事に続いて、1833 年に加筆されたシャムに関する記述があるが、その中には 1828 年のバンコク人口が示されている。それは以下のとおりである。

1828年バンコク人口

華人（納税者）	310,000
華人の子孫	50,000
コーチシナ人	1,000
カンボジア人	2,500
シャム人	8,000
ペグー人	5,000
ラオ人（新来者）	7,000
同（古参者）	9,000
ビルマ人	2,000
タボイ人	3,000
マレー人	3,000
キリスト教徒	800
計	401,300

この表には18行にわたる脚注が付されており、最初にその信頼できないことを述べ、次いで若干の補足を行なっている。その中には次のようなことが含まれている。華人の妻は、シャム人、ペグー人、マレー人、カンボジア人、ビルマ人であり、すべてシャム語を話す。華人のかなりが結婚しているとすれば、他の区分の人口は、ここに示されたよりも多くなる。コーチシナ人は1,000人と記されているが、1834年に2,000人以上がバンコクに到着している。僧の数は、Hunter氏によれば20,000人とされるが、これは実際よりも多いと思われるので15,000人とし、他民族に属する部分として1,000人を差し引くと14,000人がシャム人僧ということになる。この数は在家のシャム人よりも少ないはずだが、仮に同数とすると、シャム人男子数は28,000人となり、女子と子供は60,000ないし70,000人に膨れあがるであろう。ペグー人は5,000人と推定されているが、バンコクに居住するものは少なく、主として15マイル下流のPack-làte、および15ないし20マイル上流のSam kok および周辺の集落に住む。シャムにおける彼らの総数は40,000人である。ビルマ人(Burmans)、タボイ人(Tavoyers)は合わせて1,000ないし1,200人、マレー人は8,000ないし10,000人である。ポルトガル人の子孫が500ないし600人、キリスト教徒は約12人である(p. 208)。

1821年から22年にかけてのクロファードの使節団に関する紹介記事の中には、「首都バンコクだけでも10,000人に達すると言われる華人来住者」(p. 226)という記述がある。

シャムの貿易を紹介した1823年のCalcutta Journalの記事が再掲され、その中には、シャムの人口が5,000,000ないし6,000,000人であることが述べられている(p. 236)。カンボジアの貿易を紹介した同紙の同年の記事には、港の一つであるChantibunの人口30,000人が挙げられている(p. 238)。またコーチシナの貿易に関する記事の中に、Fai-fo (Hai Hu)の華人人口が6,000人、Kai-cheo (Cachao)のそれが60,000人と記されている(pp. 239-240)。

付録の最後に 1825 年末から 1826 年初にかけての南タイのリゴールからバンコクにかけての旅記が掲載され、途中の人口に関する情報が若干ながら記載されている。まず、リゴールに関して使節団がシンガポールでクロファードから得た情報によると、リゴールは城壁で囲まれた町であり、5,000 人の住民を有するが、以前はもっと人口が多かった。徴兵簿に記載された男子の数は、12,000 人といわれている (Appendix p. 110)。

Ban Clai は主として華人からなる 1,000 人の人口を有し、その首長は華人である (Appendix p. 112)。Phoop'hin は 1,200 人のシャム人住民を有している (Appendix p. 114)。Ch'haiya (Chaiya) の町は 2,000 人の住民を有するが、その若干は華人である。Ch'haiya 県の住民は 18,000 人ないし 19,000 人であるという (Appendix p. 114)。Lang Sewun の集落は約 600 人の住民をもつ (Appendix p. 115)。Suwi (Ban Sawi) とよばれる大きな村は約 2,000 人の住民をもつといわれる (Appendix p. 115)。Ch'hoomphon (Chumphon) の住民は、7,000 人ないし 8,000 人にのぼると言われる。ここでは華人を見なかった (Appendix p. 116)。Pathiu には華人およびシャム人の住民 200 人がおり、主として漁業に従事している (Appendix pp. 116–117)。

XIII 評価と結論

本論で行った、JIA に収録された東インド諸島を主とする人口情報を抄録する作業は、2 つの目的を有している。その 1 は、利用可能な資料を取りまとめること、その 2 は、当時のヨーロッパ人の東南アジアの人口記載にかかわる態度を評価することである。前者は、具体的な数値として既に本文中に示した。同じ地域の同時期の人口推計においても、かなりの変異があり、この時代の人口情報が、必ずしも信頼できるものではないことを示すものの、センサス以前の貴重な数値が含まれ、利用価値が存在することを指摘しておきたい。以下においては、後者について簡述する。

人口に関する情報が JIA にこれだけ多く記載されていることは、19 世紀中葉の海峡植民地における英人達の人口に対する関心が並々ではなかったことを物語っている。JIA よりも後に出版された *Journal of the Straits Branch of the Royal Asiatic Society* や、*Journal of the Malayan Branch of the Royal Asiatic Society* などの雑誌では、慣習や文化や地方史の記述により強い関心が示され、人口量の把握に関しては明らかに記載量の減少が見られる。これは、植民地の行政的な整備に従って、この種の作業が民間人の手から政府へと移行するとともに、これらの雑誌が取り上げる話題が自国の勢力圏内に限定されるようになったためであろう。Logan の時代には、彼に先行する Moor [1837] の記録を含めて、海峡植民地の英人たちが、彼らを取り巻く比較的広い世界の一般情報を求めていたと言えるであろう。ここで人口につい

て求められた情報は、性・年齢構造などのいわゆる人口学的記載を含まない人口総数に関するものであった。性・年齢構造など、人口学や統計学の記述内容にかかわることは、情報として求められてはならず、家数とか人口総数など総量に関する情報が求められ、記載されているのである。クロフアードのジョクジャカルタ人口に関する記述 [Crawford 1849] は、その中の例外であり、それだけに貴重なものといえる。

行政に直接関与しない立場にあるので、人口情報は、徴税目的とは無関係に、当該地域の住民の力を表現するための一指標として収集されている。人口情報の源は、マレー半島を中心としては英国人の記録に依拠しているが、東インド諸島に関しては、当然ながら英国人以外によるものが多く、とくにオランダ文献や旅行記などへの依存が著しい。JIA はこの意味で、紹介の役割を果たし、そこに含まれた情報の二次的な性格は避けられないものとなる。

紹介された人口量に関して、今日の眼から判断して言えることは、土着人口の過少評価がしばしば出現することである。過少評価は、政府のセンサス報告をそのまま引用した場合にも、面積と人口密度などを手がかりに推計を行なった場合にも現われる。重要なことは、それが当時は過少とは考えられていなかったということである。そのなかで、ジャワだけは例外的に政府統計が過少であることが認められている。人口記載における過少評価の出現は、土着の支配者による伝統的な誇張された表現をヨーロッパ人が否定することと、ヨーロッパ人が自ら行なったセンサス結果を無批判に受け入れることに負うところが大きいのである。これに加えて、英人あるいはヨーロッパ人に、土着人口を過少に評価しようとする態度、あるいは土着勢力を過少に見積もることへの願望があったことを否定する訳にはいかない。このことはヨーロッパ人にとっては、逆に自分たちの勢力を過大に表現することになり、キリスト教徒の数を過大に記したり、植民地への来住者数を過大に見積もったり、植民地の人口増加傾向をゆるぎのないものと仮定する人口推計を行なったりしたのである。

土着人口の過少評価が顕著なのは、とくに内陸部に関してである。たとえば、Logan [1849] が推定したスマトラ人口 (表4参照) と1930年センサスの人口を若干の民族について比較すると次のようになる。バタック人について、Logan は合計人口311,860人を提示しているが、1930年センサスにおける外島のバタック人人口は1,205,055人であった。ミナンカバウ人については、Logan の示す数値の合計は、Sapulo Bua Bandar (海岸部居住者を含む) を加えて、520,550人であるが、1930年センサスでは外島のミナンカバウ人は、合計1,983,531人となっている。1849年の人口が年率1%で増加したと仮定して、1930年の人口から逆進推計を行うと、1849年のバタック人人口は533,897人、ミナンカバウ人人口は878,799人ということになり、Logan の数値をはるかに上回っている。1%の増加率はこの時代の平均値としてはおそらく上限に属するものであって、増加率がより低かったとすれば、Logan の時代の人口はもっと多かったことになる。アチェ人については、Logan の示す450,000人が、1930

年には 830,402 人となっており、1 % の増加率を仮定した逆進推計による 1849 年人口は、367,908 人で、Logan の人口は可能性の範囲内にある。ランボン人についても 92,900 人が 181,073 人に増加しており、これもまた可能性の域内に納まっている。これらに対して、ニアス島を中心とする西部諸島の合計人口は、Logan によると 294,900 人であるが、1930 年センサス人口はより少ない 220,315 人であった。

比較的小さい島々の人口は、それらの面積に比して相対的に多く、ときには微細に記録されている。ヨーロッパ人との接触が現実には頻繁であったのはこれらの海岸部の住民であったことは言うまでもない。この限りでは、とくに Logan という人物を中心に、知識がある場合には正確に、推測による場合には過少にという結果が出現していると言える。

内陸部の生活環境が不健康なものであるという考え方が、ヨーロッパ人にとって一種の信念になっていたことにも注意すべきであろう。現実には、例えばマラリア等の熱病をめぐって、海岸の都市であるベンクーレンやバタビアが著しい死亡率を示したことが知られているし、JIA の中にも腐敗した海草から発生する瘴気がマラリアの原因であることを立証しようとする論考が連載されたりする [Little 1848 等]。健康的な海岸地は一部に過ぎないという理解も当時から存在していたはずである。

すべてのヨーロッパ人報告者が人口を過少に伝えている訳ではない。土地の事情に通じていると見られる者が、掲載された報告人口の過少を指摘している場合もある。しかし、過大であるとして否定された先行報告もあり、JIA の場合には、過少が選り採られることがより多かったとみなしてもよい。人口記述は客観性を求めながら行なわれていることは明らかである。それにもかかわらず、情報の不足が過少への判断志向を強めている。植民地化直前の時期において、一種の政治地図として、過少人口分布が描かれたと表現しても言い過ぎにはなるまい。

植民地支配の進行と共に、おそらく植民勢力側からの要求や課税の可能性をおそれて、土着の支配者の側にかつての勢力誇示とは逆に、人口の過少報告の傾向が現われたと見られるふしがある。植民地支配が進行すると、土着人口の把握の不十分さが意識されるようになる。先に述べたジャワ人口の例はこの場合に該当するであろう。

過少を修正した場合、東南アジア島嶼部における人口密度が高いものになるかということそうではない。ジャワ島とバリ島等を除く島嶼部の人口密度の絶対的な低さは、それにもかかわらず保証され、このような全体的性格の否定を伴わない部分的修正から、東南アジア島嶼部の現実の構造の理解が始められねばならないのである。

JIA よりも早い時期に刊行された Moor の書物における人口記述が、JIA におけるものよりも若干粗雑であり、気紛れであり、かつ網羅性を欠くことは否めない。これらは、土地の産物の紹介、政治および治安状況、貿易事情などの記述に付随して記載されることが多く、当時の筆者および読者の関心が、主としてこのような一般情報にあったことを物語っている。人口に

関する情報がより詳細になるには、なお若干の年月を必要としたのである。それにもかかわらず、本稿において整理したほどの人口記述が含まれていることは注目に値するものであり、当時のヨーロッパ人が人口について抱いていたなみなみならぬ関心が窺われる。これらの人口情報は、やがて行政制度の整備に基づく人口調査の実施が行われるようになると、一般情報誌から姿を消し、代わって民族誌ないし民俗誌的な叙述を内容とする定期刊行物が、情報誌の役割を果たすようになるのである。それは同時に植民地化との平行現象であったようにも思われる。

Moor の書物や *JIA* に記載された人口に関する吟味は、本稿では行なっていない。このためには少なくとも以下の注意が必要であろう。それは、人口とはなにかという見極めである。

第一に、ある人口量をもつとして記載された地名の意味する範囲は、しばしば曖昧であるし、また、政治的な勢力関係によって伸縮する。たとえば島のような限定された地理的範囲を意識的に限定して扱うのでない限り、それは現在ほとんど自然に受け入れられる特定範囲の人口というよりは、勢力圏の人口として理解されなければならない。

第二に、特定の人口として言及されたものの構成要素は何かということである。一人前の男子のみが人口として意識されている場合もあれば、男女の成人のみが人口と考えられている場合もあるように見える。戦士の数から子供を含む全人口を推定する場合に、人口構成に関する知識の不足から、推定に間違いがあると思われる場合もある。世帯の構成人員に関する扱いにおいても同様の問題がある。近代的な人口センサス以前の人口数は、それ自体で定義に関する曖昧さを含んでいるのである。

第三に、人口推定に関する態度の問題がある。既に述べたように東南アジアの住民を意味付けるときの態度が、人口数の過大評価あるいは過小評価を引き起こすのである。

以上に述べたことを考慮に入れて、人口数の再構成を図ることは、ここに記載した事例からは不可能であることは言うまでもない。その道は遠く、かりにそれが実現しても、その意味は必ずしも重大ではないかもしれない。それがいたずらに微細な趣味的作業になることを避けながら、見通しをもった作業が進められねばならないのである。

参 考 文 献

JIA に掲載されている文献

- Anderson, John. 1854. Political and Commercial Considerations Relative to the Malayan Peninsula and the British Settlements in the Straits of Malacca. Series I, Vol. 8, pp. 266–284.
 Anonymous. 1847 a. Temminck's General View of the Dutch Possessions in the Indian Archipelago. Series I, Vol. 1, pp. 127–144.
 ———. 1847 b. Some Remarks on the Dyaks of Banjermassing. Series I, Vol. 1, pp. 30–34.
 ———. 1848 a. Some Notices of the Northern or Dutch Half of Celebes. Series I, Vol. 2, pp. 673–685.

- _____. 1848 b. The Geographical Group of Borneo. Series I, Vol. 2, pp. 428 – 447.
- _____. 1848 c. Notices of European Intercourse with Borneo Proper Prior to the Establishment of Singapore in 1819. Series I, Vol. 2, pp. 498 – 512.
- _____. 1848 d. Traces of the Origin of the Malay Kingdom of Borneo Proper, with Notices of Its Condition When First Discovered by Europeans, and at Later Periods. Series I, Vol. 2, pp. 513 – 527.
- _____. 1848 e. Notices of Chinese Intercourse with Borneo Proper prior to the Establishment of Singapore in 1819. Series I, Vol. 2, pp. 611 – 615.
- _____. 1849 a. Mr. Burns's Paper on the Kayans of the N. W of Borneo. Series I, Vol. 3, pp. xxx iii – xxx vii.
- _____. 1849 b. The Orang Komering. Series I, Vol. 3, p. 534.
- _____. 1849 c. The Island of Mindoro. Series I, Vol. 3, pp. 756 – 766.
- _____. 1850. Pulo Aur. Series I, Vol. 4, pp. 191 – 198.
- _____. 1850 – 51. The Geographical Group of Celebes. Series I, Vol. 4, pp. 664 – 686 ; 761 – 765 ; Vol. 5, pp. 180 – 187 ; 250 – 253.
- _____. 1850 – 52. Notices of Penang. Series I, Vol. 4, pp. 629 – 663 ; Vol. 5, pp. 1 – 14 ; 189 – 210 ; 400 – 429 ; Vol. 6, pp. 143 – 172.
- _____. 1851 a. The River Barram. Extract from a Journal Kept during a Visit to That River in the H. L. Steamer "Plute." Series I, Vol. 5, pp. 677 – 690.
- _____. 1851 b. The Lampong Districts and Their Present Condition. Series I, Vol. 5, pp. 625 – 641 ; 698 – 701.
- _____. 1851 c. A Short Sketch of Banka. Series I, Vol. 5, pp. 255 – 291.
- _____. 1851 d. Account of the Island Bawean. Series I, Vol. 5, pp. 383 – 399.
- _____. 1851 e. Sketch of the Steam Route from Singapore to Torres Straits. Series I, Vol. 5, pp. 613 – 624.
- _____. 1851 f. Cambodia in 1851. Series I, Vol. 5, pp. 430 – 438.
- _____. 1852 a. Notes of an Ascent of the Mountain Kina-Balow. Series I, Vol. 6, pp. 5 – 17.
- _____. 1852 b. Ceram Laut Isles. Series I, Vol. 6, pp. 689 – 691.
- _____. 1853 a. Journal of an Excursion to the Native Provinces on Java in the Year 1828, During the War with Dipo Negoro, Series I, Vol. 7, pp. 138 – 157.
- _____. 1853 b. The Kei and Arru Islands. Series I, Vol. 7, pp. 64 – 72.
- _____. 1854 a. Notes on the Chinese of Pinang. Series I, Vol. 8, pp. 1 – 27.
- _____. 1854 b. Notices of Singapore. Series I, Vol. 8, pp. 403 – 419.
- _____. 1855. Notes on the Chinese in the Straits. Series I, Vol. 9, pp. 109 – 124.
- _____. 1856. Journal of a Tour on the Kapuas. Series II, Vol. 1, pp. 84 – 126.
- _____. 1858. Notice of Pinang. Series II, Vol. 2, pp. 182 – 203.
- _____. 1859. The Law of England in Pinang, Malacca and Singapore. Series II, Vol. 3, pp. 26 – 55.
- Bleeker, P. 1847 a. Contributions to the Statistics of the Population of Java. Series I, Vol. 1, pp. 75 – 76.
- _____. 1859. Minahasa. Series I, Vol. 3, pp. 56 – 64.
- Blundell, E. A. 1848. Notices of the History and Present Condition of Malacca. Series I, Vol. 2, pp. 726 – 754.
- Braddell, T. 1852. Abstract of the Sijara Malayu or Malayan Annals, with Notes. Series I, Vol. 6, pp. 33 – 55.
- Burns, Robert. 1849. The Kayans of the North-West of Borneo. Series I, Vol. 3, pp. 140 – 152.
- Chopard, J. M. 1849. A Few Particulars Respecting the Nicobar Islands. Series I, Vol. 3, pp. 271 – 275.
- Crawford, John. 1848. On the Malayan and Polynesian Languages and Races. Series I, Vol. 2, pp. 183 – 228.

- _____. 1849. Notes on the Population of Java. Series I, Vol. 3, pp. 42 – 49.
- Croockewit, H. 1854. The Tin Mines of Malacca. Series I, Vol. 8, pp. 112 – 133.
- Favre, P. 1849. A Journey in the Menangkabau States of the Malay Peninsula. Series I, Vol. 3, pp. 153 – 161.
- Horsfield, Thomas. 1848. Report on the Island of Banka. Series I, Vol. 2, pp. 373 – 427.
- Jackson, Louis S. 1850. Census of Singapore and Its Dependencies Taken under Orders of Government in the Month of November and December, 1849. Series I, Vol. 4, 付表.
- Lay, G. Tradescant. 1852. A Few Remarks Made during the Voyage of the Himmaleh in 1837. Series I, Vol. 6, 574 – 584.
- Le Fevre. 1847. Details Respecting Cochin China. Series I, Vol. 1, pp. 49 – 65.
- Little, Robert. 1848. An Essay on Coral Reefs as the Cause of Blakan Mati Fever and of the Fevers in Various Parts of the East. Series I, Vol. 2, pp. 449 – 494.
- Logan, J. R. 1849. A General Sketch of Sumatra. Series I, Vol. 3, pp. 345 – 365.
- _____. 1850. The Silong Tribe of the Mergui Archipelago. Series I, Vol. 4, pp. 411 – 428.
- _____. 1851. Note at Pinang, Kidah & c. Series I, Vol. 5, pp. 53 – 65.
- _____. 1855. Ethnography of the Indo-Pacific Archipelagoes. Series I, Vol. 9, pp. 273 – 305.
- _____. 1856. The Maruwi of the Baniak Islands. Series II, Vol. 1, pp. 1 – 42.
- Low, James. 1849. A Translation of the Kedah Annals Termed Marong Mahawangsa. Series I, Vol. 3, pp. 162 – 181.
- _____. 1849 – 50. An Account of the Origin and Progress of the British Colonies in the Straits of Malacca. Series I, Vol. 3, pp. 599 – 617; Vol. 4, pp. 11 – 26; 106 – 118; 360 – 379.
- _____. 1850. Observations on Perak. Series I, Vol. 4, pp. 497 – 504.
- O'Riley, E. 1859. Notices on Karen Nee, the Country of the Kaya or Red Karens. Series II, Vol. 3, pp. 1 – 25.
- Oxley, T. 1856. The Banda Nutmeg Plantations. Series II, Vol. 1, pp. 127 – 140.
- Pattullo, J. 1858. Account of a Journey to the Lake of Ranow in the Interior of Kroee, Series II, Vol. 2, pp. 287 – 294.
- Presgrave. 1858. Journey to Pasummah Lebar and Gunung Dempo, in the Interior of Sumatra. Series II, Vol. 2, pp. 1 – 45.
- Rigg, C. R. 1852. On Coffee Planting in Ceylon. Series I, Vol. 6, pp. 123 – 142.
- Rigg, Jonathan. 1849. Tour from Sourabaya, through Kediri, Blitar, Antang, Malang and Pasuruan, Back to Sourabaya. Series I, Vol. 3, pp. 75 – 89.
- Siah U Chin. 1848. The Chinese in Singapore. Series I, Vol. 2, pp. 283 – 290.
- St. John, Spenser. 1849. The Population of the Indian Archipelago. Series I, Vol. 3, pp. 379 – 384; 721 – 723.
- Thomson, J. T. 1851. Description of the Eastern Coast of Johore and Pahang, with Adjacent Islands. Series I, Vol. 5, pp. 135 – 154.
- Topping, Michael. 1850. Some Account of Kedah. Series I, Vol. 4, pp. 42 – 44.
- Valentyn, Francis. 1850. Description of Malakka and Our Establishment There. Series I, Vol. 4, pp. 696 – 703.
- Vaughan, J. D. 1858. Notes on the Malays of Pinang and Province Wellesley. Series II, Vol. 2, pp. 115 – 175.
- Westerhout, J. B. 1848. Notes on Malacca. Series I, Vol. 2, pp. 171 – 173.
- Westgarth, W. 1851. Report on the Condition and Prospects of the Aborigines of Australia. Series I, Vol. 5, pp. 704 – 727.
- Willer, T. J. 1849. The Battas of Mandheling and Pertibi. Series I, Vol. 3, pp. 366 – 378.
- Windsor, Geo. 1850. The Trading Ports of the Indian Archipelago. Series I, Vol. 4, pp. 380 – 399; pp. 530 – 551.
- Windsor, G. 1863. Handbook for Colonists in Tropical Australia. Series II, Vol. 4, pp. 1 – 187.
- Zollinger, H. 1851. The Island of Lombok. Series I, Vol. 5, pp. 324 – 344; 459 – 469.

その他の文献

- Anderson, John. 1826. *Mission to the East Coast of Sumatra in 1823*. (Reprinted in 1971 by Oxford University Press).
- Anonymous. 1839. Bevolking van Java en Madura. *Tijdschrift voor Neerlandsch Indie* II (1).
- Bleeker, P. 1847 b. Bijdragen tot de Statistiek der Bevolking van Java. *Tijdschrift voor Neêrland's Indië*, Negende Jaargang, eerste deel.
- . 1863. Statistisch-Economische Onderzoekingen en Beschouwingen op Koloniaal Gebied. *Tijdschrift voor Neerlandsch Indie*, Nieuwe Serie, 1(1).
- Braddell, T. 1861. *Statistics of the British Possessions in the Straits of Malacca*. Penang: Penang Gasette Printing Office.
- Francis, E. A. 1839. Korte beschrijving van het Nederlandsch grondgebied ter Westkust Sumatra, 1837. *Tijdschrift voor Neerlandsch Indie* II (1).
- Money, J. W. B. 1861. *Java or How to Manage a Colony*. London: Hurst and Blackett. (Reprinted in 1985 by Oxford University Press).
- Moor, J. H. 1837. *Notices of the Indian archipelago, and Adjacent Countries*. (Reprinted in 1968 by Frank Cass & Co.)
- Newbold, T. J. 1839. *Political and Statistical Account of the British Settlements in the Straits of Malacca*. Vol. 1. London: John Murray.
- Peper, Bram. 1970. Population Growth in Java in the 19th Century. *Population Studies* 24(1).
- Raffles, Thomas Stamford. 1817. *The History of Java*. 2 vols. (Reprinted in 1965 by Oxford University Press.)
- Temminck, C. J. 1846 – 49. *Coup-d'oeil Générale sur les possessions néerlandaises dans l'Inde Archipelagique*. Vol. 1 – Vol. 3. Leide: Arnz & Comp.
- Widjojo, Nitisastro. 1970. *Population Trends in Indonesia*. Ithaca & London: Cornell University Press.